

二段階選抜は何をもたらしたのか

～大量の不合格者の悲しみと、揺らいだ高校入試への信頼～

この討議資料で考えてほしいこと

2004年度高校入試の検証

前期選抜に関するアンケート（学校用）

前期選抜に関するアンケート（個人用）

前期選抜に関するアンケートの分析

まとめと提言

2004年10月
長野県高等学校教職員組合高校教育専門委員会

この討議資料で考えてほしいこと～高校の統廃合をすすめるための入試制度～

2002年3月『県立高等学校の今後の通学区の在り方について』(以下「報告書」)が公表されました。約1年間9回の検討をへてまとめられた報告書は、「今後の通学区については、地域ごとの教育条件の均衡を図る必要があることから、長野県の地勢による生活圏や交通の利便性に配慮した、専門学科と同じ4通学区制とすることが望ましい。また、通学区の境界地域における通学範囲を考慮して、隣接する通学区への志願を認めることが望ましい」と結論づけました。

「受験競争の緩和や地域高校の存続の観点から現行通学区制を評価し、通学区域の拡大を懸念する意見もあったが」(同「報告書」)、前述の結論を導き出したのです。「一部特定校への志願が過度に集中することはないと考えられる」(同「報告書」)と述べたことは果して正しかったのか、このことを検証することが県教育委員会に求められています。

この「報告書」は、「通学区域拡大に伴う課題と課題すべきこと」を、7項目最後に列挙しました。「過度の受験競争を避けるためにも、多様な個性を評価できるような様々な入学者選抜の方法を工夫し、推進すること」。今回の二段階入試制度は、これによって導入されました。県教育委員会は、高校現場に十分な検討をする余裕を与えず、次から次へと報告を求めてきました。

その結果どうだったのか。この資料の副題の「大量の不合格者の悲しみと、揺らいだ高校入試への信頼」のとおりだったと考えます。前期選抜合格者 5196名、不合格者 7381名という数字は、「過度の受験競争」そのものだと思うのですがいかがでしょうか。

「報告書」では、入試制度の「改革」のほかに、「高校における特色ある学校づくりの推進」と「高校の再編の問題も視野に入れ、全県の高校のありかたなどに配慮した適正な規模や配置」を課題として掲げました。高校の特色づくりをいっそうすすめ、生徒の集まらない高校は統廃合していく、その動きを加速させるために入試制度を多様化する、という構造ができあがりしました。新しい通学区のもとで、「高校の特色づくり」「入試制度の変更」「高校の統廃合」を、三位一体の関係で推進しようとしたのです。

私たちの危惧は、現在立ち上がっている「高校改革プラン検討委員会」の「中間まとめ」を見て、現実のものとなりました。

高校の適正規模を、「標準目標値」として「1学年6学級」と決めました。「標準目標値を下回っても機械的に学校統合の対象ではない」としながら、「上回っても存続すると機械的に考えるべきではない」として、すべての高校が統廃合の対象になることを宣言しました。

地域高校は、費用対効果の観点から統廃合の対象となります。

定時制高校は、多部制・単位制高校設置と引き換えに統廃合の対象となります。

職業高校は、総合学科高校の設置と引き換えに統廃合の対象となります。

都市部高校は、ジョイント高校として統合される可能性があります。

「この中間まとめでは、数値のようなものは示されないが、将来的には長期的な視点に立って高校教育のシステムの規模(=県立高校の総数)について明確化することが必要であると判断する」と記載されています。どうしても高校の「数」を先行させたいのです。「魅力づくり」はその後から取り組むのです。

これが「中間まとめ」の本音です。

新しい入試制度は、高校側が意識するにせよしないにせよ、生徒の集まらない高校を淘汰していく制度として機能するのです。

加えて、「適格者主義の強化」という側面も指摘しなければなりません。『長野県立高等学校入学者選抜方法の改善について(基本方針)』という文書を学校現場に示し、県教委は「志願者の多様な個性を評価できるように、各高等学校や各学科の特色に応じて様々な入学者選抜方法を実施する」とその「目的」を説明していました。高校側の「評価する権利」「選抜する権利」を強調したのです。

その後県教育委員会で承認された同文書(2003.2.12)では、「志願者が多様な個性によって学校選択ができるように、各高等学校や各学科の特色に応じた様々な入学者選抜方法を実施する」と書き換えられていました。ここでは、子どもたちの「学校選択の権利」を強調したのです。(以上下線引用者)

学校と県民に異なる文書を示したことに、新しい入試制度の矛盾が表れています。この二つの権利は、調和するのでしょうか。結果的に、都市部高校は大量の不合格者を出さざるをえず、低倍率の高校でも定員内不合格者を出しました。「多様な個性」を「評価」したのですから、責められるべきではないでしょう。

結果的にこの制度は、高校の「適格者主義」を強化したのではないのでしょうか。募集の観点を具体化すればするほど、この傾向は拡大するでしょう。

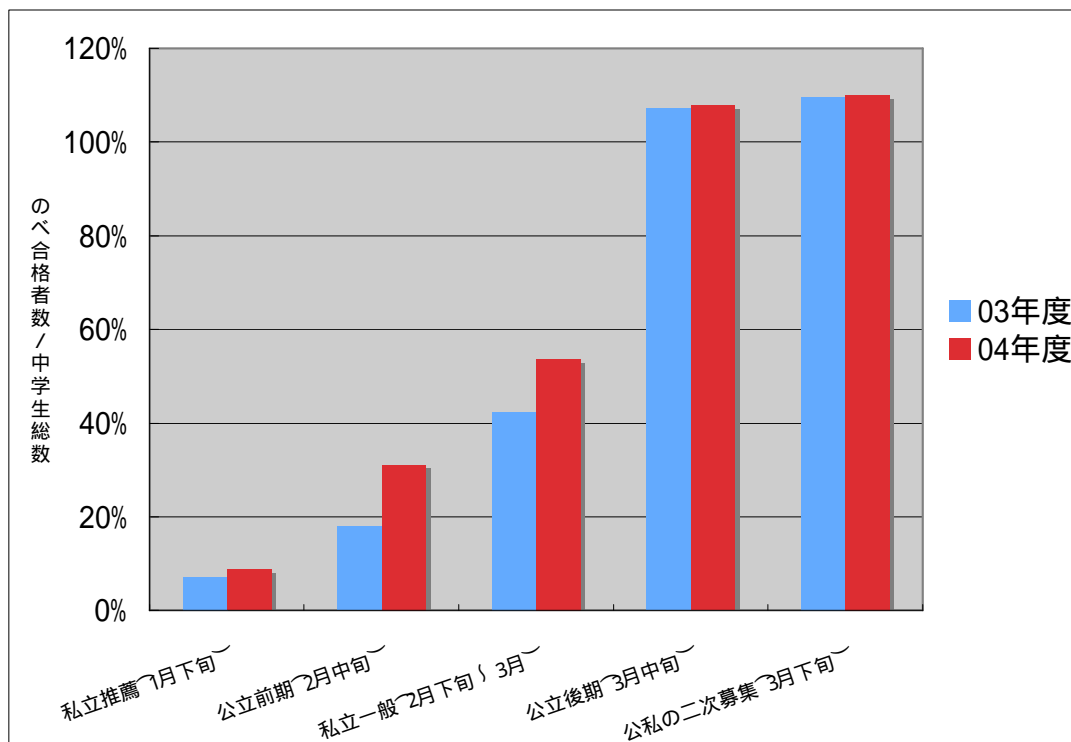
様々なデータや資料、アンケートを使って討議資料を作成しました。「高校全入」の言葉は、今でも消えていないはず。「すべての子どもたちにゆき届いた後期中等教育を」という理念に立ち返り、活発な議論が行なわれることを願っています。

2004年度高校入試の検証

1. はじめに

混乱を引き起こしたといわれている今年度の入学試験について、高校教育課のデータと、県民新聞のまとめた表をもとに検討してみます。まず、下の図は全日制の公立私立合わせて、入試の段階ごとにのべ合格者がどれだけ増加したかのグラフです。

図1 のべ合格者の増加のようす（全日制について；公私あわせて）



合格した生徒が増えてゆくなかで、焦る公立後期受験生。同じ学校を受験し、いっぽうは合格、いっぽうは不合格。どう接していいのかわかりかねる生徒たち。合格した生徒にしても、素直に喜べない生徒と、逆に解放感から手がかるようになってしまう生徒。不合格に落ち込む生徒と、面接にばかり気を取られて肝心な後期学力試験への対策が間に合わない生徒、それらに翻弄されるクラス担任……。

前期選抜が導入されて、早い時期にのべ合格者数が増加するだけでなく、不公平感と不透明感が教室にたちこめ、クラス担任は事務仕事量も、使うべき神経も、ともに倍増したと思われます。

高校のようすは、あらためて書き連ねる必要もありません。ことに大量の志願者が集中した都市部の学校では、自校の大学受験生も抱えるいっぽうで前期選抜の対応に迫られ、多くの教員が忙殺されました。

たしかに、何か新しいことを始める際に、利益とともにやってくる不利益を恐れては何もできません。しかし、はたして前期選抜とは、それだけの犠牲を払って得るものがあった制度なのでしょうか。この章では、教育委員会高校教育課の『高校入試について高校生と保護者に聞きました—新しい高校入試に関するアンケートの集計結果より—』（以下『報告書』）という調査報告をもとに

(1) 大量の不合格者と激化した入試

(2) 県教委の前提は達成されたか 「得意分野」は生かされたかのふたつに分けて検証したいと思います。

2. 2004年度公立高校入試をみる

(1) 大量の不合格者と激化した入試

県教委は前期選抜導入に際して「入試の激化はない」と言いました。はたしてそうだったのでしょうか。それを検証するにあたって、今回の入試全体の特徴を簡単に述べると以下のようになります。

都市部進学校を中心とする、前期選抜での大量の不合格者
安全志向が働き、後期選抜では都市部進学校への集中が緩和される
進学校から中堅校に流入、中堅校では後期選抜で不合格者増加
中堅校不合格者が地域校の二次募集へ。一部の地域校で定員割れの解消

全日制の前期選抜では、5196名の合格者の裏側で、7,381人の受験生が不合格になりました。前期選抜は受験生が殺到してパンク状態になった学校も、定員数に達せずに後期選抜に余裕を残した学校もあります。

次ページの表は、前期選抜の倍率が4倍以上の高校に関する数字です。ほとんどは都市部のいわゆる「進学校」ばかりだということがわかります。募集枠でいうと全体の10%程度の学校群が、実に全体の3分の1以上の不合格者数を出しているのです。また、3倍以上の倍率に広げて考えると、20%の募集枠の学校群で、3,894人、全体の半分以上である52.8%の不合格者を出しています。

表 1 前期選抜の合格・不合格者数（志願率3倍以上の学校）

新	旧	学校名	学科	募集人員	志願者数	倍率	合格者数	不合格者数
1	1	飯山北	普通	8	60	7.5	10	50
	3	長野	普通	32	186	5.81	32	154
		長野吉田	普通	42	204	4.86	42	162
	4	屋代	普通	36	187	5.19	36	151
		篠ノ井	普通	56	228	4.07	56	172
2	5	上田東	普通	32	182	5.69	32	150
		上田染谷丘	普通	28	142	5.07	28	114
	上田	普通	36	148	4.11	36	112	
3	7	諏訪清陵	普通	12	129	10.75	12	117
	8	伊那北	普通	24	143	5.96	24	119
	9	飯田	普通	42	212	5.05	42	170
		飯田風越	普通	48	230	4.79	48	182
4	11	松本深志	普通	16	142	8.88	14	128
		松本蟻ヶ崎	普通	28	246	8.79	28	218
		松本美須ヶヶ丘	普通	42	249	5.93	42	207
		松本県ヶヶ丘	普通	56	255	4.55	56	199
	12	大町	普通	24	127	5.29	24	103
4倍以上校 合計				562	3,070		562	2,508
(3倍以上校 合計)				1,142	5,035		1,141	3,894
全県				5,558	12,568	2.26	5,196	7,372
4倍以上校 / 全県				10.1%	24.4%		10.8%	34.0%
(3倍以上校 / 全県)				20.5%	40.1%		22.0%	52.8%

さて、松本美須ヶヶ丘の69人減少(03年度の130人 04年度の61人)を筆頭に、これらの学校の多くは、後期選抜での不合格者数が減少しています。これは、志願変更前の高倍率に、受験生が大事をとって各自の安全圏の高校に志願変更したためでしょう。また、中学校側からの指摘や県教委アンケートの報告書にもあるとおり、前期選抜での不合格体験が受験生を慎重に走らせた傾向も数字から読み取れます。

さて、表1にあるような学校の後期選抜受験を断念した生徒は、どのように志願変更したのでしょうか。各通学区の「中堅校」に流れたのです。

後期選抜の不合格者は、上田東の52人増加(03年度の60人 112人)を筆頭に、田川、軽井沢、長野東、下諏訪向陽などといった地域の中堅校で増加傾向が見られました。「進学校」から「押し出された」受験生が「中堅校」に押し寄せたのです。今度は、ここから押し出された生徒、つまり後期選抜で「中堅校」を不合格となった生徒がいるはずで。

当然かれらは、公立・私立の二次募集を利用しました。その結果、03年度は入学者数が定員に満たなかった多くの学校で、定員割れが解消されました。そのいっぽうで、03年度も04年度も、定員割れを大きく起こしたままの学校もあります。

表 2 03 年も 04 年も 20 人以上の定員割れがあった学校

	03 年度	04 年度	欠員数は
A 校	- 39	- 32	7 人減少
B 校	- 39	- 33	6 人減少
C 校	- 34	- 29	5 人減少
D 校	- 39	- 34	5 人減少

いままでの調査結果を検証してみましょう。

表 1 に表れているように、入試が激化したことは火を見るより明らかです。なかでも都市部進学校の加熱ぶりは顕著で、多くの受験生が集中し、そして信じられない高倍率の選抜に 1 校で 200 人以上の不合格者を出しているのです。

この激しい前期選抜は、新入生にもあまり歓迎されていません。

県教委では『報告書』のなかで「前期選抜については職業科・総合学科、及び志願倍率が低い高校では好評でした」とまとめています。けれども、「受験生の集中した都市部進学校では好評ではなかった」ということには言及していません。職業科や総合学科、低志願率の学校にはもともと受験生は多くありません。県教委は、以上のことから推論される「前期選抜は、多くの受験生に不評だった」ということを、現在のところ認めていません。

激化した入試のいっぽうで、その逆の問題点もあります。安全志向が働いた今回の入試は、例年定員割れを起こしている学校に生徒が集まりやすかった状況でした。にもかかわらず、表 2 にあるとおり、一部の地域校では定員割れが解消されません。問題の原因は、表 2 の学校群の教職員の努力とはまったく関係ないところにあります。前期選抜がそもそも、受験生の得意分野や学校の特色を生かすことのできないものだからです。地域校でも特に恵まれない条件にある学校には、前期選抜ではどうやっても受験生は集まらないのです。

それは本来的に、前期選抜では受験生の学力・調査書を観点にせざるをえないからです。次の項目では、その問題点について検証します。

(2) 県教委の前提は達成されたか - 「得意分野」は生かされたか

教育委員会高校教育課の『報告書』では、前期選抜は「得意分野を生かしたり受験機会を拡大するものとして期待されています」とあります。この理念どおりにこの制度は有効活用されたのでしょうか。『報告書』をもとに下の表を作成しました(なお、この項目の数字もすべて同報告書のもです)。選抜方法の選択の類型と、その結果によって、受験生を 4 つのタイプに分けたものです。

なお、県教委のアンケートの回収率が 94.1%なので、数字は近似値として考えてください。

表 3 前期・後期選抜の利用者の比率とその結果

	A 群	B 群	C 群	D 群
前期選抜	利用 (66%)			利用せず (34%)
	合格 (28%)	不合格 (38%)		
後期選抜		前期と同校受験 (26%)	他校 (12%)	後期のみ受験 (34%)

A 群...前期選抜を活用し合格できた生徒

B 群...前期選抜を利用したものの、従来の後期選抜で合格できているはずの生徒

C 群...前期選抜を利用したが、すくってあげられなかった生徒、前期選抜の不合格で慎重になり、志望校を変更した生徒

D 群...前期選抜を受験せず、後期選抜で入学した生徒

ではそれぞれについて検討しましょう。

まずは C 群、すなわち後期選抜で志願変更をした生徒です。彼らはその理由についてこう回答しています。

「前期は可能性に、後期は合格確実な高校を(55%)」「前期で不合格になり自信をなくした(20%)」「前期で不合格になった高校を受験したくない(10%)」。以上 3 つをあわせると 85%にのぼりますが、特に後 2 者の悲痛な声が気にかかります。

また、B・C 群、すなわち前期選抜不合格の生徒のうち、「その感想は？」の問いに、「ショックが後まで尾を引いた」と答えた生徒が 24%います。

この 2 点から想像できることは、「ショックが尾を引いた」の回答をした生徒は、B 群よりも C 群に多いのではないのでしょうか。県教委のアンケートはクロス集計(多変量解析)ではないのであくまで推測ですが、受験生の 12%にあたる子ども(C 群)は、前期選抜が不要どころか、マイナスに作用したと言えるでしょう。

次に、前期選抜に不合格だったものの後期では合格できた B 群、前期選抜に惑わされずに後期で合格した

D群の生徒です。彼らにはもとより前期選抜は必要なかったことは言うまでもありません。

最後にA群、つまり前期選抜合格組です。

前期選抜の合格者が、仮に後期選抜を受験したとして、両者の合格者名簿はほとんど同一のものなのではないでしょうか。倍率3倍以上の学校(多くが都市部「進学校」)では前期選抜合格者の20%強を出していますが、こうした学校の特色にあう生徒は結果として、学力・調査書が高得点の生徒です。これらの生徒に、前期選抜を受験させる必然性があったのでしょうか。「進学校」の教員は、前期合格の生徒は後期でも当然合格していたのではという思いを持っていました。いっぽう生徒も、前期選抜は二度手間が無駄な努力だという本質を見抜いていた生徒も多かったのではないのでしょうか。

そして重ねて言いますが、3倍以上の倍率の人気校では、一部のわずかな生徒を合格させると同時に、前期不合格者数の半分以上を占める受験生を落とさざるを得なかったのです。そのなかには先に見た、心に傷を負わせてしまったC群の子どもがいるのです。高倍率の人気校での前期選抜には、意義はまったく見いだせません。

そこまでの高倍率ではない学校でも、倍率が1倍を超えた場合は不合格者を出さねばなりません。合格者の決定にあたって、高校によっては、調査書とくに評定値の果たす役割は大でした。ここでもまた、前期選抜合格の生徒は、仮に後期選抜を受験したとしても合格していたのではないかという思いがなくなることはありません。

加えて、倍率が1倍を下回った学校でも不合格を出さざるを得なかった学校もあります。募集の観点にあう生徒を集められない現状があるのです。

たしかに、前期選抜のおかげで後期学力試験では合格が難しい学校に入学できたという喜びの生徒が、A群だけには少数いたかもしれません。得意分野や適性などを、面接や小論文、実技などで評価されて合格した生徒です。しかしこのわずかな利益と、見てきたようなB・C・D群の不利益とを天秤にかけた場合、不利益のほうが勝りすぎています。大部分の受験生にとっては、前提であるはずの「受験生の得意分野を生かす」という題目が達成されていません。

(3) その他の問題

以上、大きなふたつの問題点について検証しましたが、その他の論点についてもあげておきましょう。

絶対評価における中学校の評定値を、評定値が大きな意味を持たざるをえない前期選抜の判断基準にしてよいのかも議論の余地があります。

県教組の報告によると、合格した生徒と不合格の生徒の間には絶対評価での評定に対する疑念は厳然とあり、それが年明けの中学3年の教室の雰囲気にも、大なり小なり影を落としました。中学校の現場に疑心暗鬼を生む仕組みを必然的に持っている、それが前期選抜なのです。

面接でも評定でも大きな差がつけられない受験者のなかから合格者を決定するのに、高校側はたいへん苦労しました。その選考過程が中学生や保護者、中学校教諭からは「不透明だ」思われかねません。逆に個別の能力を見ようとして中学校の学習範囲を超えるような問題を出せば「逸脱している」との批判も噴出しました。制度のあり方がすでに、問題を含んでいるのです。

複数の教員が同時に面接試験を行う際には、当然ひとつの評価基準を設けます。しかし、いかに上手に運用したとしても、複数の人間がひとつの基準にのっとることは完全にはできません。得点配分を明らかにするなどの方策を05年度前期選抜からは取り入れますが、制度自体が根本の部分では公平性・明白性を欠くと言わざるを得ません。

「受験機会の拡大」が県教委の目標でした。たしかに現象的には受験機会は2回に増えました。しかし、前期選抜のおかげで後期選抜の門が狭まり、結果的に実質的な受験機会は減少した生徒もいるのではないのでしょうか。受験機会の拡大とは実質的には何なのかも検討の余地があります。

前期選抜に関するアンケート(学校用)～2004年7月実施～

回答 93学科

問1 あなたの学校の前期選抜への対応は次のうちどれですか。

今年度前期選抜を実施し、来年度も同じ形式で実施する。	66
今年度前期選抜を実施し、来年度は一部変更して実施する。	18
今年度は実施しなかったが、来年度は実施する。	3
今年度実施せず、来年度も実施しない。	6

問2 (問1で と回答した学校のみ答えてください)変更点は何ですか。現時点で決定していることを理由とともに答えてください。

志願理由書を課さないことにした。	0
面接を行わないことにした。	1

作文・小論文を行わないことにした。	3
実技検査を行わないことにした。	1
その他	15
・ 自己PR文を課さないことにした。(a)	
・ 集団面接を実施しない等 詳細について検討中。	
・ 小論文を行うこととした。(b)	
・ 作文を加える。(c)	
・ 募集定員を3割から5割とした。ただし、これが県に認められるかはまだわからない。(d)	
・ 募集枠の変更	
・ 募集枠を30% 50%に増加	
・ 募集枠を変更した。%を減らした。	
・ 募集要件をかえた。	
・ 募集の観点の変更。(e)	
・ 募集の観点の変更	
・ クラブの推薦での評価項目を厳しくした。(f)	
・ 理数科のみの実施だったが、普通科でも実施することになった。(g)	

【理由】

- ・ 次年度県は面接を強制していると思うが。(の理由)
- ・ その評価がむずかしいため。かわりに面接にも使えるように志願者理由書を課すことにした。(")
- ・ 志願理由書に含めることで受験生の負担を軽減するため。(a")
- ・ 学力を問う小論文が昨年度行われた高校があり、県の指導のないままであり、本校も評価のひとつとして採用することにした。(b")
- ・ 選抜基準を増やす。(c")
- ・ 面接・実技検査の評価を工夫することで受験生の負担を軽減したい。
- ・ 今年度実施したところ、2倍の倍率があったため。(d")
- ・ より具体化を求められたため。内容の整理。(e")
- ・ クラブ活動で優秀な成績を上げた生徒を評価できるようにするため。(f")
- ・ 職員会での提案、議論はあったが、受験機会を増やす。中学生の要望が多い。時代の流れ。全県的な動き、などが一応の理由であった。(g")
- ・ まだ決定していないので、ここでは書けません。
- ・ 中学校により「家庭分野」の履修内容等に違いがあるため選抜についてより平等性を期したいと考えた。

問3 (問1で と回答した学校のみ答えてください) 来年度実施を決めた理由は何ですか。

- ・ 周りの多くの学校で前期選抜を実施したことと、意欲ある生徒の入学を期待したから。
- ・ 管理職からの指導。他校の様子をみて。
- ・ 「理由は様々あるが」今年度定員割れをしてしまったため

問4 (問1で と回答した学校のみ答えてください) 来年度も実施しないと決めた理由は何ですか。

- ・ (簡単に言えば)メリットよりデメリットが予想される。またメリットとされることも、実際にメリットたらしめるには、技術的に相当難しい面がある。
- ・ 合否基準について明確で客観的な入試方法とは言えないため。面接・作文・小論文等、審査基準の統一について難点が多すぎる。
- ・ 本校の教育方針に合っていない制度である。現在の前期選抜の受験内容では、その生徒を判断することは困難。
- ・ 前期選抜を実施することによって、志願者に特別な利点をもたらすことがないと思われるから。
- ・ 受験生に対し本校全日制の特色として打ち出せるほどの独自性がない。実施した学校の状況を見るとかなり弊害が見られる。
- ・ 通信制には前期・後期試験の適用なし

問5 (問1で 、 と回答した学校のみ答えてください)今年度前期選抜の導入を決めた理由は何ですか。

1つ選んでください。

意欲がある生徒、個性的な生徒、志望動機が明確な生徒の入学が期待できるから	47
生徒を選抜できない従来の長野県方式の推薦入試にくらべ、高校側が主体的に選抜できる制度だから	0
受験生にとって受験の機会が増える制度だから	1
前年度まで従来の推薦入試を行っており、同様な効果が期待できるから	15
周辺の学校が導入を決め、本校で実施しないと「優秀な」生徒が他校に進学してしまうから	6

学校長の強い要請があったから

2

その他

9

- ・ 理数科は従来より推薦入試を行っており、普通科は他校が導入するため、足なみをそろえた方がよいだろうと判断したから。
- ・ 全県で実施するので当然、当校もするものだという空気が始めから有った。もちろん、やらないという意見も多くあったが。
- ・ 県教委、地域住民からの要望で導入決定。
- ・ 県教育委員会の指導に従って。
- ・ 廃止の意見が多かったが、今年度の入試の検証もすまないうちに止めるのは不信を招くという消極的な理由
- ・ 2～3年実施してみないと、その善し悪しが分からないから。
- ・ やめる訳にはいかない。
- ・ 導入1年で止めるのはどうか。もう少し続けてみる。(〇 を選択)
- ・ はじめから前期選抜ありきでスタートしたように思う。推薦入試は毎年おこなっていたため、その形態が変わったくらいの考えであったかもしれない。(〃)
- ・ 何となく、今年の1年生が落ち着いているから。(〃)

問6 (すべての学校が答えてください) 前期選抜について職員会で十分な議論を尽くすことができましたか。

できた 2 9

不十分であった 2 7

どちらともいえない 3 2

問7から問14までは今年度前期選抜を実施した学校が回答対象です。

問7 前期選抜を行うにあたって新たな委員会を発足させましたか。1つ選んでください

新たな委員会をつくった 1 9

既存の分掌上の組織で検討した 5 6

その他 6

- ・ 推薦委員会関係も含む学検委員会を新設。「学検委員会」は今まで無かった。
- ・ 発足させていない
- ・ 従来の学力検査委員会の名称を入学者選抜委員会に変更した。
- ・ 推薦入試委員会→入試委員会に変更
- ・ 既存の組織(学検委員会)を中心にメンバーを加え新しく構成
- ・ 既存の委員会の人数を倍にした。

問8 「志願理由書」については、どのように利用しましたか。1つ選んでください

提出を求めなかった 2

提出させたが、合否判定にはいっさい考慮しなかった 1 1

面接の質問内容に反映させた 6 2

合否の判定基準に一部用いた 7

その他 1

- ・ 面接カードとして会場で書かせた。

問9 (面接を実施した学校のみ答えてください) 面接の実施と評価について、どのような問題点がありましたか。複数回答可。

とくに問題はなかった 2 4

質問内容の検討が不十分で、不適切な質問をしてしまった 2

短時間の面接では評価するのが困難だった 3 4

面接官によって評価が分かれた 2 9

その他 1 9

- ・ 面接の評価も開示の対象となるので、ストレートな評価をつけづらかった。
- ・ 面接官の評価基準を統一するよう打ち合わせしたが、多少ゆれがでてしまった。
- ・ 面接での評価を総合的判断の中でどのように反映させるか。以前の推薦と異なり、不合格者が出る限り、慎重にならざるをえない。
- ・ 面接室によって評価のつけ方に差が生じた。

- ・面接官ごとの、各面接会場ごとの評価の客観性、公平性について問題あり。
- ・短時間の面接でも評価はできたが、受験生が多く一人あたりの時間が短くなり、受験生にとって自己PRの時間が短く思えたと考えられる。
- ・公平を期すため質問項目を統一しているが、受験者に応じてもう少し深く、あるいは、他の内容を質問したいという声もありました。
- ・マニュアルに沿った質問しかできず、深く突っ込めなかった。
- ・「聞き返しはしない」という決め事で面接を行った。話がふくらまない生徒は評価も低く、時間も短くなった。でもそうしないと面接点の差が生まれない。
- ・多数の志願者で待ち時間が長くなったこと。
- ・面接の待ち時間が長くなってしまった。
- ・受験者が当初より増え面接の割り振りに戸惑った。
- ・対策不足だった。
- ・面接について研修を行ったが経験不足の面はあった。
- ・面接官の評価によって合否が決まることで、面接担当の先生には予想以上のプレッシャーを感じた。担当になりたくないという意見があった。
- ・面接したが、合否にはほとんど関係ない。
- ・中学での面接指導に差があった。

問10 (小論文あるいは作文を実施した学校のみ答えてください) 小論文あるいは作文の実施と評価について、どのような問題点がありましたか。複数回答可。

とくに問題はなかった	13
問題(題名)について、校内で十分に検討できなかった	5
客観的、公平な評価が困難だった	11
評価の基準づくりが困難だった	20
その他	8

- ・問題作成者の負担が、非常に重いこと。
- ・中学校からテーマと問題文の内容について疑問視する声あり、学校としては良問だと考えている。
- ・中学校からテーマと問題文の内容について疑問視する声あり、学校としては良問だと考えている。
- ・県からの指示で「学力検査と受け取られないこと」とされた結果、思うような出題ができなかった。
- ・小論文(作文)の形式の明確な基準が不明朗なため、作成に苦慮した。
- ・今回の出題では判断できる能力に限界があった。
- ・評価に時間がかかった割に、判断材料としては弱かった。
- ・小論文の得点率が、全体として、当初予期していたものより低かった。

問11 (実技試験を実施した学校のみ答えてください) 実技検査の実施と評価について、どのような問題点がありましたか。複数回答可。

とくに問題はなかった	2
受験生にとっても、高校にとっても事前の準備が大変だった	1
客観的、公平な評価が困難だった	1
評価の基準づくりが困難だった	2
その他	0

問12 調査書をどのように利用しましたか。1つ選んでください。

学習の記録の評定値のみを用いた	13
学習の記録の評定値に加えて特記事項(出欠の記録、特別活動の記録、総合所見など)を点数化して用いた	18
学習の記録の評定値のみ点数化し、特記事項の内容も合否判定に利用した	43
絶対評価であり、中学校間の比較が難しいため、利用しなかった	0
その他	8

- ・出欠、健康の記録 - 3段階。学習の記録 - 4段階。
- ・に近い。判定会議の時に、問題になる生徒に対してのみ、判定材料の一つとした。
- ・を数値化せず利用
- ・の特記事項の一部について点数化し、他の部分も含め総合的に利用した。
- ・総合的に利用した。
- ・特に点数化はしないが、学習の記録及び評定値を選抜会議において参照した。
- ・評定値はそのまま使い、特記事項は点数化せずに用いた。
- ・部外秘(問、不適切)
- ・であるが、特記事項は説明し、点数化はしなかった。(を選択)

問 1 3 合否判定の基準はどのようなものでしたか。

あくまでも「募集の観点」を合否判定の基準にした	5 1
「募集の観点」に記述していない要素の「基準」をあらかじめ設けて、合否判定をした	9
甲乙つけがたい受験生の判定には「募集の観点」、事前に設けた「基準」以外の要素も加えて合否判定をした	1 1
その他	1 0
・ 「募集の観点」に沿って、より具体的な判定基準により判定した。	
・ 原則として「観点」にしたがい、評定値、作文、面接の状況を含めて、総合的に判定	
・ 「募集の観点」に基づきながら、「基準」をさげて判定した。	
・ 「募集の観点」に合わない生徒も面接結果により合格させた。	
・ 「募集の観点」自体が曖昧で、合否に反映させることができなかった。	
・ 内申点と面接評価を点数化し、総合点に表わして、順位に並べ、定員までとした。	
・ 調査書と作文、面接で合否を決めた。	
・ 定員に達せず落とそうにも落とせなかった。	
・ 部外秘（問、不適切）	

問 1 4 前期選抜で入学してきた生徒についての現時点での印象をうかがいます。

学校生活に意欲的に取り組む生徒が多い。	2 1
学力検査のための受験勉強をしていないせい、後期選抜で入学してきた生徒とくらべやや学力が劣る印象がある。	3
現時点ではわからない	5 5
その他	4
・ 期末考査を終えたところで、追跡調査を行う。	
・ わからない、簡単に評価できるものではない。	
・ 問題行動が少なく落ち着いている。だから、それが前期選抜と関係があるかと思うが、そう思っている職員も多い。	
・ 本校の生徒層の中でみると、比較的まじめな生徒が多いように思われる。	

問 1 5（すべての学校が答えてください）前期選抜をはじめとして、今年度の入学者選抜制度は大きく変更されました。このことについてご意見をお書きください。あなたの学校にとっての制度変更の功罪についてもお書きください。

[導入が拙速]

- ・ とにかく唐突な導入で県当局からの指示がころころ変わり、現場が振りまわされた点が問題。ただ、受験生にとってはどうだったのかは、もう数年実施した上でないと評価できないように思う。
- ・ 前期選抜で入ってきた生徒の調査もまだ 1 学期中間テストの順位しか出ておらず分析ができていません。1 年のみでやめてしまうのではなく、2～3 年は様子を見て見るということで継続することになっていますが、ゆっくりと論議を深めている時間がないというのが現実です。中学生にとっては、人により受け取り方が違うので一概にはよし悪しを言うことはできないと思いますが、県はもっと、十分に準備を現場に促してから実施すべきだったと思います。
- ・ 入学者選抜制度を大きく変更する場合は、まずモデル校で実施し、不備等の改善策を充分たてた上で、全校に拡大実施すべきではなかったかと思う。制度変更によって大きく負担がかかったが、本校としてそれだけのメリットがあったか、まだわからない。
- ・ 教育現場における十分な論議がなされないまま、新しい制度が次々と導入され現場は混乱するばかりです。新制度に変えるにしても早急すぎて、見切り発車の状態ですから、いつか欠陥が露呈するのではないかと心配されます。
- ・ 16 年度前期選抜の全体が、いまだに評価されていらず、全て高校に任される現状は、受験生にも保護者にも良くないことである。何が良くて、何が悪かったのかを明確にした所から、17 年度の入試体制は取り組むべきである。それが何も無い為、再度、各高校現場が、混乱し、受験生に悪影響を与えてしまう。
- ・ 前期選抜の導入を短時間で終わらせるを得ず、大変苦労した。県の指示も急だったり、内容があいまいで苦慮した。前期選抜は、多々問題があるが、制度として導入した以上、1 年でやめるわけにはいかない。今後、改善しながらよりよいかたちで実施せざるを得ない。その後、前期選抜自体の見直しをすべきと考える。
- ・ ゆっくり検討する時間がなかった。
- ・ 全てが急な変更だったため、中学校、高校の両方の現場に大きな負担だったと思う。功罪については、現時点では不明だが今後入学生生様子を見て判断したい。
- ・ 合格数についての変更が直前にあったようにやや準備期間が不足した面があったと思う。短時間の面接の中で、受験生の実績や意欲を正しく判断することがむずかしかった。このことは、次回の選抜においても予想され、判定基準をいかに設けるかが課題である。前期合格者の入学後の実績についても見ていく必要を感じる。

- ・ 来年度の実施を含め、議論不足の感じがする。特に来年度の実施決定にあたっては、全体的な考察や、地域等の声を聞く間もないうちに決まってしまう感じがする。
- ・ 職員会はおろか地域の声を全く無視した形で導入することだけが一人歩きしている。本質的な議論を職員会でまず行い、地域の声のきちんと耳をかたむけながら、一番いい方法（やる、やらないを問わず）を考えていく必要性を痛感している。
- ・ 今回の制度の導入により、受験生に過度のストレスを感じさせてしまったことについて、申し訳なく思っている。職員会での議論も十分とは言えない状況の中で行われたことは、後に禍根を残す結果になってしまったのではないかと心配である。又、今回の入試を実施する前に県とのやりとりの中で、県からの指示が次々と変更され、現場は混乱した。担当の教諭も対処に苦慮していたようである。今回実施しているアンケートの結果を集約し、至急対処していただきたい。
- ・ 導入の仕方が拙速で十分な論議をしないうちに始まってしまった。中高とも、お互いに情報が十分になく、受験生には不安を与えたと思う。本校にとっての功罪は不透明。久しぶりに定員いっぱいにとったことは明るい材料だが、今まで以上に校内での学力差もあるように感じられる。
- ・ 現場が混乱し十分な議論を尽くせない中で行われたことに、職員全体で不満がある。また、二度手間であつたという議論も聞かれる。新入生の中には、前期選抜で不合格となり、後期選抜で合格した生徒もおり、その生徒の中には不合格を体験したためか、学校生活への意欲が失われかけている者も見られ、生徒への影響も大きいと考えられる。
- ・ 前期選抜では、客観的な判断が難しい為、再考が望まれる。また、募集枠も拡大する等、不合格者を多く出さないような対処が必要である。十分な議論及び県民合意が成されていない中での実施で、県の突発的なやり方に不満が多い。
- ・ あまりにも早く進みすぎ、準備（議論も方法も）がバタバタとおこなわれ、十分な共通理解をしていないように思える。今の時点で入学してきた生徒の様子は、はっきりつかめないが、「よいものであった」と思えることを期待するのみ。
- ・ 制度の変更が急であった。
- ・ 改革が非常に拙速であり、十分な準備期間もなく前期選抜を開始したために中学校、高校双方に混乱を招き、入試制度への信頼性を揺るがせている。本校全日制は前期選抜を実施しなかったが、周辺校が右へならえで実施する中で、行わないことには風当たりもあり、またそのことによる入学者の質的变化も懸念される。しかし、本校のように将来像も定まらないままに個性を打ち出せというのは不可能であり無責任であると考ええる。（そのせいか県からの指導もないらしい）

[制度全般の問題点]

- ・ 県教委の言うところの「志願者の多様な個性と、各高校の個性を活かす選抜制度」は、受験父母、県民には響きのいい言い方ではあるが、現在の高校の負っている社会責任という観点からすれば既に整合性を持たず、また現実の運用（今年度の様子）からすれば受験生と親の一定の誤解のもとに初めて成立する、虚構の制度と言わざるを得ない。この制度をプラスにすることのできる高校もあることは否定しないので、今後、少なくとも県が全高校に一律実施を決めることのないよう、高教組は力を尽くしてほしい。心ある親の痛切な批判に耳を傾けてほしい。
- ・ 前期選抜について、まだ一度も実施していないため、制度変更についての結果は、わかりません。ただ職員会の議論の方向性としては、「実施して当然」という県全体の雰囲気の問題があり、各学校の先生方の御意見を多少なりともお聞きすると、やはり実施はしているが、多くの問題もありという感想を持ちます。
- ・ 各学校の独自性が前期選抜を導入するにあたり、強調されていたが、実際には様々な制約があり、本校としては本年度の実施に困難を感じている。「どのような生徒を求めているのか」という募集の観点と密接に関連する小論文の内容までも県教委による介入がみられた。また、募集枠についても、本校が考える適正な数が、県教委の指導とは、かけはなれている。
- ・ 来年度の選抜方法を検討するにあたり、校内委員会において一定程度の議論を行った。そこで出された意見のうち、主なものを記す。・ 中学3年生の立場からすると、自分が受験する入試制度がいつまでも決まらないのは確かに困る。だが、年度変わり教員の異動もあり、非常に慌ただしい中で前年度の総括をし、来年度の中身を決定するのは、現実的にはかなり厳しい日程である。・ 本年度初めて前期入試を実施し、2ヶ月ほど経ったが、まだ新入生の様子が見えてこない部分がある。（緊張感があって、悪く言えば「猫をかぶって」いる。）したがって、前期入試を実施してみたの根本的な総括は、1年間が経過してからでないのではないか。今回は小幅な変更（面接における質問方法など、校内の調整で対応できる部分）にとどめ、「昨年並み」にならざるを得ないのではないだろうか。・ 前期選抜の「募集の観点」では、数値を明記しないようにという県からの指導があったはずである。しかしながら、各高校のホームページを見ると、堂々と数値を謳っている学校も見られた。県のほうでもガイドラインを明確にしきれていなかったのではないのか？
- ・ 前期選抜導入時には、職員内に賛否両論があった。学力はやや不足していて学力検査の入学は難しいが、運動部や生徒会のリーダーとして活躍し、学校内を活性化してくれる生徒を前期選抜でとりたいという期待から実施に踏み切った。しかし、実際に行ってみると、メリットよりもデメリットの方が大きいと感じられ、現在では取りやめを含めて「見直し」を主張する意見が高まってきている。具体的には、1. 前期選抜の時期が、大学入試（センター～私大）の時期と重なり、目の前にいる在校生を指導する時間が削られてしまう。2. 入学してきた生徒の中には「面接では本当のことを語らなかった。口先だけで入ってしまった。こんなのでいいのかな」という感じ」と言う者もいる。果してこれが教育的な制度と言えるのか疑問。3. 前期選抜

で不合格となり、後期選抜で合格してきた生徒の中には、前期で面接した先生に不信感を持ってしまっている生徒もいる。入学後の関係構築がとても難しくなる。4. 自己推薦という方式をとる以上、各校で工夫をしても曖昧さは避けられないと思う。この問題は高校以上に中学校を混乱に陥れていると思います。中学の先生と連携をとるいい機会だと思います。本音で語ってくれる中学の先生をお呼びして意見を聞く機会を持つてはいかがでしょうか。

[入試業務の増加]

- 前期選抜の日程と大学受験指導の時間が重なり多忙を極めた。3年の担任の先生を面接担当からはずそうと努力したが、受験生が多く一日で終わらせるためにはどうしてもはずすことができなかった。高校の「入り口」では前期選抜の意義も多少なりと感じるが3年間の成果を出す「出口」の指導がそれによって不十分になるのはいかなるものかと思う。前期選抜の意味が大きいのは、やはり都市部校だと思う。県境に近い本校周辺は、普通科、特色学科、工業科、農業科も通学圏内に限られた数しかなく、特色を認めたからといって下宿までして通学するケースは少ない。制度は全県一律でなくともよいのではないか。
- 入試業務が膨大に増加した。(県教委のアンケートの処理も大変であった。)(本校にとってではないが)中学校側は進路指導に不安を感じている。前期選抜の試験内容で何を重視するかについて意見が分かれた。「前期選抜は合格しにくいもの」とはいいながら、不合格になった中学生にとってのショックは大きい。
- 入試業務が煩雑化した。
- 入試業務等、とにかく忙しくなった。
- 多忙中の中、この制度が導入されたことで一層忙しくなった。入試作業に追われ、在校生の指導が手薄になってしまう。制度自体に対する認識の一致が、うめ切れぬまま実施
- 入試業務等とにかく忙しくなった。
- 制度変更への取り組みが通常の学校運営に負担を及ぼす。
- 仕事が増加し、他の教育活動に支障あり。
- 現時点では何とも言えない。しかし、現場が一層多忙化したことは事実である。
- 特に初年度であり、前期選抜に関わる業務が大変であった。学区の拡大の影響が他校にあったため(本校は、旧5通以外からそれほど多くない)前・後期とも多くの不合格者を出すことになってしまった。
- 初めての試みということもあり、事前準備が大変で、短縮授業や授業カットによって、在校生の授業進度に大きく影響した。前期入試で合格した生徒が入学までの期間を無為に過ごしたため、学力低下の恐れがある。
- ただ、一部の係に大きな負担がかかり、在校生の指導、授業は今までと変わりがないため、負担増となった。
- 受験の機会が増えたのはよい。事務的仕事が増え、超多忙になった。面接を担当する職員には、不安とプレッシャーが広がった。

[不合格の影響]

- 本校にとって前期選抜、後期選抜、再募集ともに、入学意志の確認を志望理由書や面接で行うことができまないので、前年度より人数も意欲も向上している。しかし、再募集の中には、前期・後期ともに不合格となり、傷つき、しかたなく本校を志願した者が若干あり、不本意入学を今もひきずっている。全県的には、この入試制度は罪な面が大きい。廃止して希望者全入を県民論議にかけろべきだと思う。
- 本校の場合、従来の長野方式の40%枠から50%枠に拡大しただけであるので、これといった変化は無い。しかし、前期選抜で不合格となった者のなかには、後期選抜では受験せず、他校へ流れたケースも見うけられ残念であった。
- 高校への意欲(クラブ、または学習、またはリーダーシップ)がある生徒を観点の中心にしたが、そのような生徒はあまり応募してこなかった。中退生、不登校、発達障害、情緒障害の生徒の応募が増えて、我々の考えていた生徒とは程遠い生徒が応募してきて対応に苦慮している。落とせる入試といわれても、本校のような状況の学校では、不合格にしにくいのが現状です。中学生とその親、中学・高校の教師、それぞれ前期選抜のとらえかたが違うのでは。4通学区制をはじめとする入試改革は、中学生の動きを見ると失敗したのでは。新学習指導要領で学習の負担が減ったのだから、進学校は後期入試一本でいった方がよい。高校の入口をいろいろいじっても教育の根本は何も改善されない、そのことは大学入試を見てもはっきりしているのではないかと思います。

[学力が心配]

- 全生徒に、このことについて学校独自のアンケートを実施した。前期の合否から後期まで、間が有りすぎ、合格した生徒は、受験勉強もせず入学したため、入学後の学力が心配。全く意味のない制度だと思う、意見が多い。理由はマスコミ等の集約、中学校側の集約した意見等と同じ。
- 本校をねらう生徒の場合、安全志向の生徒が他校に逃げる傾向が顕著で、それが後期迄続き、結局今年度は女子の数が例年に比して激減した。また、部活動での実績が中心に評価されて入学した生徒は、学力で他生徒との差が著しい生徒も中にはおり、本校で3年間学習を継続出来るか心配。
- 科により差はあるが、生徒が様変わりした。工業科(三科)は例年と大差は無いが、商業科は生徒の学力差が二極分化し、授業で種々の問題が出始めている。これは入試制度の変更にもなう影響だと思われる。学校内ではアンケートからも、入試制度変更を評価しないとする職員が評価するの約2.6倍程あり、否定的な考えが強い。

[学校間格差が拡大]

- ・ 前期選抜は必要ない(何のメリットもない、負担と混乱と幻想のみ)通学区の拡大を合わせると、特に交通の不便な本校などは弊害が大きい。(都農間、地域間格差を助長させ、人気のない学校を整理しようとするつもりかもしれないと疑いたくなる)
- ・ 国際教養科を受験するメリットが弱くなったのでは。(どの学校も推薦入試を導入したため)
- ・ ここ何年も募集定員に満たないような学校にとっては、輪切り上位校や、同レベル校が軒並み実施となればやらざるをえない。でも学校格差は広がる一方だ。同レベル校がいい子取り合戦をしても5年・10年後の長い目からすれば、ばからしいことだ。

[合否判定が難しい]

- ・ 「募集の観点」にあった生徒のみが応募してくるのであれば、別に基準によって判断を比較的是っきりつけることができるのかもしれない。ところが、観点にあっているのかどうかを見極めることもむずかしい状況にあった。志願理由書は、本人以外の者の手が入っている可能性が高く、また面接での質問は、短時間で見極めるのは不可能である。しかし、毎年方法を変えていたのでは、入学してきた生徒の流れをつかみにくい。3年間くらいは、同じ形式でいくしかないのではないか。
- ・ 募集の観点を設定して、その観点到合致する受験生の面接で選択しようとしても、中学側が事前に手を入れて練習をしてくる受験生を見分けることは困難で、受験生にも納得のいかない判定ができることが多い。運動部・文化部共に活動実績をランクづけし点数化することは極めて困難、また、文化部は発表の場が少なく評価の場にさえ載ってこないため、不公平感がある。
- ・ 前・後期合わせると受検者は少し増加したが、これが学校の向上につながるわけではない。本校では、前・後期共面接を実施したため面接する職員の負担が非常に大きかった。その反面、判定時、受検者に対しての平等性確保には自信が持てない。昨年までの中学の推薦のほうが、応募者は少なかったが、学力の高い生徒を進めることができ本校にとってベターだったと思う。学校関係の手当についても一考してほしい。面接した職員に出ても誘導や警備をした職員に出ない、など。
- ・ 学力検査を2回実施することにより、受検機会を増やした方が良く、たった7分の面接で合否を決めることは実際問題として不可能と言える。
- ・ あまり良いとは思えない。特に前期選抜の公平性の確保が難しい。受験生を惑わすばかりである。
- ・ この件にかかわらず、知らない間に話しがもちあがり、職員会で昨年は反対であったが前校長の強い要請でやることになった。在学生の授業を実施しながら短期間で何百人もの志願者に対応することは不可能である。罪：・中学生の負担が大きい・不合格者は本試験までたちなおれない。・不平等な資料で、公平な判定はできない。・面接時間が充分とれず形式的になる。・条件がつくと真面目でコツコツやってもめだたないと志願できない。・中学生には過酷である。・中学教師もさらに忙しくひとりひとりへ指導ができない。・定員が充たない学校が「特色ある学校づくり」の1つとしてやるのは分かるが、そうでない所で不合格者を多く出すような制度は、中学生に不安をもたせるだけである。・面接で(5分)判定できない。実施するなら県教委で統一して責任をもったらどうだろうか。

[学校推薦のほうがよい]

- ・ 以前の学校推薦方法の実施が好ましい。合格することを前提とした試験を前期では行うべきで、現在のままだと、多くの不合格者が出てしまうので、以前の形態にもどすべきである。
- ・ 従来の中学校長推薦で、本校は充分だと考える。募集の観点が抽象的な記述しかできず、受験生が「自分は該当する」と思えば受検できたところに問題がある。功 従来通り上位層を合格者として受け入れることができた。罪 従来より低いレベルで合格した者がいて、そのものは中間審査でも下位に沈んでいる点。定員いっぱい合格者を出したため。
- ・ 前期選抜では十分な合否判定の基準についての検討がされないままの実施となった。従来の学校推薦の方がよかったと思う。特に専門科では強い意欲がなければ困難。

[改善すべき]

- ・ 大きく捉えれば良い方向に向かっていると思われます。しかし、現時点においては、問題が多く改善をしながら続けていくべきだと思います。
- ・ 様々な問題点はあっても、試行錯誤しつつ、よりよい入試制度を作るためには、単年度ごとの変更も必要悪だと考えている。
- ・ 前期選抜導入にあたっては、従来の学校推薦の欠点を変更するところから始まったと思われる。受験生、保護者への明確な実施内容や合否基準の説明を果たすべきか。(受検の透明性)中学生にとって負担にならない選抜にするよう、高校側の配慮が必要。
- ・ 職員の前期選抜に対する思いが違いため(スポーツ推薦だったり学力優秀な生徒だったり)選抜会議が紛糾し長時間となり後味の悪い会議となってしまった。複数ある「募集の観点」別に合否基準を決めなかった(意図的に)ことも、作文・面接評価の合計の数値化の基準や、当日まで作文の題を全職員に公表しなかったことも、後味の悪い原因になった。だから(作文・面接が悪かった生徒を、調査書が高くても落とされている)結果的に受験生の調査書の上から合格させたという印象しか残らなくて不満を抱いている先生が少なくない。また、あれだけ論議と時間をかけて作文と面接を検討したのに、結果的に「調査書重視の判定だったので、あんなに一生懸命とりくむ必要がなかった」という声もあった。よって結論としては「自己推薦」という意味合いより、「受験複数化」という意味合いが強いこと、合わせて基礎学力検査を行えば、誰がみ

- でも客観的に判定でき、後味の悪い会議にならないと考える。基礎学力検査を強く主張したい。
- 二次選抜でも面接を課し、可否の基準にできてよかった。地域高校はもっと指定校推薦（現時点ではできない）等より柔軟な選抜方法が自主的にできるようになるとよい。9教科入試にせよという事もある。
- 前期選抜は、募集の観点にそった生徒が応募し、倍率1.5倍となった。しかし、その結果20名（定員80名、前期40名）もの不合格者を出さざるを得なかった。逆に後期では定員を割ってしまい、十分な選考ができなかった。できれば、前期の募集枠がもっと各校の実情によって変えられると特色が出しやすいのだが。（80%くらいでいきたい）
- 定時制では前期選抜は不登校生と社会人を想定している。不登校を経験した新入生が例年、前期と後期を合わせて70%になっている。前期選抜枠が最大限50%となっているが、それを引き上げて70%程度に出来ないだろうか。
- それぞれの学校の独自性を尊重してほしい。（前期選抜の実施も含めて）

[両面あり]

- 前期選抜試験では、意欲的な生徒を今までよりも多く合格させることができありがたい。反面、面接（面接）と調査書・理由書だけでは、合否判定の資料が乏しく、ボーダーラインの生徒の判定は極めて難しかった。不合格になった生徒にも、後期に再び受験した者が多勢いたが、何人かは、他校へ回ってしまった。最初から本校への入学の意志がある生徒をできるだけ多く入学させたい。
- 学力試験がなく、また中学で選抜されることなく、誰でも受験できるメリットはあるが、とりあえずやってみるかの安易な受験生も目についた。
- 高校側は特に問題はない。受験する側の不合格対策がたいへんだと思う。2年目を迎える今年度の前期選抜で受験者数、あるいは、前期試験に対する意識がどう変わるか。
- うちの場合には特に困ることはなかったが、他の大規模校や進学校は大変だっただろうと推察します。

[有効である]

- 前年までの推薦入試よりも募集枠が広がり、より目的意識を持った生徒が多く入学しました。このことは学力検査で定員割れをおこしそうな学校にとってはメリットがあります。ただし、枠が広がり入学した生徒がどの様に学校に影響を与えるかは、これからの様子を見ていくしかないと思われまます。
- 全体の意見ではありませんが、（個人的な意見ですが）本校のような地域（田舎）の進学校にとっては、必要な制度だと思えます。
- 従来の学校長推薦の時代から行っており、募集人員、募集の観点などを考えてみても、前期選抜には、うまく移行できたと思う。問14とも関連するが、2,3の例外はあるものの、前期合格のほとんどの生徒は、生活態度も良好、学習にも意欲的に取り組む。後期試験も採点のあたりはガタガタしましたが、2年目の今年からは落ち着くのではないのでしょうか。
- 前期選抜の入学生については、現時点ではおおむね良好である。面接や作文を通して、なぜ入学したのか、その意識を持たせたことはよかったと思われる。
- すでに本校では、以前から実施されているため、今のところ大きな功罪はない。
- 通学区の拡大と前期選抜の実施により、本校は今年度定員を充足することができたことは、本校にとってよいと考えます。
- 評価の基準は、まだ、検討、議論を重ねる必要がある。しかし、本校のように定員を割る事の多い地域高にとっては、志望してくれる生徒を受け入れる事のできるメリットが大きい。定員の50%という枠を取り払ってもらおうと、尚良いのだが。
- 準備も含めて、大変な事務・作業量であった。今後検討していくべき課題は、いろいろあるが、通学区制が事実上なくなるなか、本校としては、前期選抜実施の意味はあったと考える。
- 前期選抜により、主体的に高校を選択する中学生が増加した。意欲的な生徒を確保することが可能になった。高校独自で入試を実施できることから主体的に入学試験に取り組むことができるようになった。県の下請け的な入試から可及的速やかに脱却したい。入試を通して学校のあり方を真剣に考えることができるようになった。学校間の違いをより明確にしていくことは、学校の活性化につながると考えている。今回の入試改革は、学校にとっては全体的にプラスであったと思う。ただ中学生にとっては、多々負担の多いことだったようだ。中途半端に県が介在する現行の方法をやめ、学校が独自に、より主体的に実施できるようにしてほしいと切に願っている。

[現時点では何ともいえない]

- 功罪はまだわからない。
- 今年度の入学生は、学習意欲、態度が全体的に良い印象を受けるが、選抜結果を客観的に総括していないため、現時点では何ともいえない。

前期選抜に関するアンケート（個人用）～2004年7月実施～

回答1960名

問1 あなたは前期選抜を評価しますか。1つ選んでください。

評価する	231 (11.8%)
評価しない	1092 (55.7%)
どちらともいえない	637 (32.5%)

問2 問1の回答を選択した理由は次のどれですか。3つまで選んでください。

学校が独自につくった募集の観点によって選抜するので学校の特色づくりを進めることができるから	272
学力検査では測れない能力で生徒を選抜できるから	242
中学生にとって受験のチャンスがふえるから	183
目的意識をもち、志望動機が明確な生徒を選抜できるから	303
面接・小論文などでは公平・客観的な評価はできないから	786
入試業務があまりに煩雑で、在校生への教育がおろそかになるから	632
学校間競争をあまり、学校間格差が鮮明になるから	274
中学生にとって、受験競争の緩和にはつながらないから	619
中学生には不合格体験による精神的な影響が心配されるから	594
多くの不合格者を出してしまうから	232
学力検査を課さないため、学力低下を招くおそれがあるから	507
その他	203

【記述】

[導入が拙速]

- ・ 導入が急であり十分議論されていないから。
- ・ きちんと将来を見てははじめなかったのは×
- ・ 安易に新しいことをしようとしたのがいけない。
- ・ 時間をかけ現場の意見をきかずスタートした県教委への不満があるから。
- ・ 制度の中味を言うまえに、導入までが半年足らず、ろくな議論もなく、あまり拙速である。
- ・ しっかりした方針がないままの実施で、現場も対応に大変でした。
- ・ 少なくとも入学時にこのような選抜を行うことを発表して3年で実施するべき。
- ・ 急激な変化で受験生や家庭に動揺を与えたのが、そのまま続いている。
- ・ 高校の職場、そして、現役中学生を含めて、どのような入試の改革が望ましいのか、長期に検討をしなかった。
- ・ 前期選抜にはよい点もあるだろうが、十分な検討がされないまま導入されたことに問題がある。
- ・ 県教委主導（強制的）で余裕のないままこの制度が入ってしまい、このような結果が出ている。県はどのように考え、評価しているのか知りたい。
- ・ 誰が何の理由で始めようとしたのか今だ明確でないような気がする。
- ・ ここ数年の施策がすべて各学校の意見を考慮する間もなく、県教委の一方的な方針を押し付けてきているから。
- ・ 中学生、中学、高校の職員に無用の不安と混乱を与えた。もっとじっくり、それぞれが取り組むべきことがあるだろう。
- ・ 学区制を検討するなら先ずその問題を十分検討し、更に検討結果を検証した上で、つまり一定の評価をし、しかるべき成果（を見た）が得られた後に導入すべきだった。導入が拙速にすぎたと思います。
- ・ 十分な論議を尽さず、いきなり上位下達の形で実施され、現場における対応不十分、また、学校に任されるのではなく実施されたため、本来あるべき姿の自己推薦が生かされなかったと思われる。
- ・ 制度をしっかりと検討する必要あり。
- ・ 混乱した。

[認識のずれ]

- ・ 県の思惑、学校の思惑、受験者側の認識、それぞれにズレがあり、ある意味で詐欺的であり、茶番でもある。県と学校は、自分たちの意図するところをもっと率直に提示すべき。
- ・ 「自己」の評価、考え方に差があり、その差も大きい。
- ・ 中学側と高校側で、きちんと連携がとれていないように思えるところもあるから。
- ・ 前期選抜の意義そのものに問題もあるが、中学生や親、教師でそのとらえ方がまちまち。入試制度を変更しても今の状況を変えることにはならない。
- ・ 高校の考えている前期選抜試験ではなく、単なる受検機会が増えたとする中学生が多く意味をなしていないと考えるから。

[中学校への影響]

- ・ 不合格者や後期選抜の生徒の授業への妨げになることがあったと聞いています。（安心して授業に身が入らなかつたらしいです）
- ・ 「2月の教室に、前期合格者、前期不合格者、後期受験者がいて雰囲気がよくない。受験に向けての体制づくりが

- ・ 難しい」と聞いているから。
- ・ 中学でのクラス経営に深刻な影響を与えかねない。
- ・ 中学のクラス内に合格組、再度挑戦組、前期未受検組が混在し、クラス運営・学習指導共に相当な困難が想像される。
- ・ 前期の合格者発表後、後期までの中学での人間関係、後期への準備への支障は大きいと思えるので。
- ・ 中学の担任が2月中やりにくくなると思う。
- ・ 合否者が出た後の中学校の教育現場は大変。
- ・ 中学校を混乱させ、授業などがあるそかになる。決定の過程もでたらめで、どのような生徒を取るかも決まっていな
- ・ い。ろくな議論もしていない導入であった。
- ・ 中学校の進路指導に負担をかけ、生徒・保護者の学校に対する不満感や疑念を誘発しやすい。
- ・ 中学校側の業務、指導が大変。
- ・ 中学生・教職員共負担が大きい。
- ・ 中学校が大変だと思う
- ・ このような活動をすることで、個々の生徒に中学の先生が向い合ってもらえるのではないか。
- ・ 中学校での指導により、中学生が少し変わったかも？
- ・ 中学側の指導の仕方に疑問があるから。

[中学生への影響]

- ・ 学検のための勉強の他に、小論文(作文)・面接の対策としなければならない、生徒も中学校も大変であるため。
- ・ 中学生、その保護者には、二度の別々の準備は負担であると考えられる。
- ・ 受験生が前後期2度の受験チャンスはあるものの受験対策(全く違う試験であるので)等で負担は大きい。
- ・ 子供をキズつける機会を増やすだけ。
- ・ 中学生に「これで自分も学力はないが、あの高校に入学できるかもしれない」と大きな勘違いをさせ、学習そっちの
- ・ けで、ボランティアや、その他の活動をしなければならない気にさせる点も問題。
- ・ 中学生に過度の期待を抱かせるので。
- ・ 中学生に対して、この選抜制度自体よくない。
- ・ 前期に面接して落ちた生徒が入り、教員の不信につながる。
- ・ 学力が多少低くても受かる生徒がいる分、今までの入試制度では受かっているはずの生徒が入れなくなるのだから”コツコツと勉強はするけど面接・論文が苦手”である生徒が不利になるのは良くないと思います。

[学力低下が心配]

- ・ ダメでもともとという受験生が多くなり高校全体の学力低下が心配。
- ・ について、特に「読み書きそろばん」とも言えるような、ごく基本的な力がなくてもよいという風潮を助長する。
- ・ 選抜された生徒の学力がやしい。
- ・ 早く合格すれば、勉強はしなくなる。2～3月の追い込みによる学力向上がなくなってしまうから。
- ・ 合格した生徒が全く勉強しなくなる、何故、前期選抜が必要かわからない。
- ・ 早期合格により、最も勉強する2月中旬から3月までの1カ月全く勉強しない。
- ・ 中学生は3月までしっかり勉強すべきであり、受験競争は必要な体験である。受験勉強をしない中学生は高校には
- ・ いない。
- ・ 前期試験合格者が、勉強しない(合格後)。

[学校推薦のほうがよい]

- ・ 昨年までの長野県方式の何がいけなかったのかわからない。特色学科や、職業科での推薦はわかるが、普通科で
- ・ 学力以外の何を特色とし、どういう能力を持った生徒を前期選抜として、他の者に先んじてとれというのか。学力が
- ・ あるというのは、立派な能力で、それによって選抜して何が悪いのかわからない。
- ・ 学校推薦の良かった点は、中学である程度責任を持って推薦する生徒を選別できた点である。3年間指導された先
- ・ 生の生徒を見る目の方が、たった数十分で生徒を見る高校側の目よりも確かである。
- ・ 内容を改善することに努めたとしても、旧来の方法より良い制度になる見込みがない。
- ・ 従来の推薦方式の方がはるかに良かった。学力の評価をしない推薦なんてありえない！
- ・ 今まで通りでよいと思うから。
- ・ 今までで十分

[二段階選抜の問題点]

- ・ 「受験機会が増える」という表現は誤解を招く。合格した生徒にとっては受検回数は1回だけ。不合格だった生徒に
- ・ とっては「不合格機会」が1回増えただけ。
- ・ 後期試験でも合格確実な生徒を取るような前期は全く無意味。手間がかかるだけ。学科試験で2割ぐらい枠
- ・ を残し、それを特色ある子でつめるのなら意味があるか。
- ・ 1回で応募していた生徒を2回にわざわざ分けてとっていることに変わらないから。
- ・ 二度手間
- ・ 一度でよい。
- ・ 全体として7000人の不合格者を出すシステムは、ムダが多すぎる。
- ・ 前期選抜で不合格の生徒が後期で同一校を受験しない傾向にある。

- ・前期選抜で不合格になってしまうと、後期選抜でもあきらめてしまう。能力はあるのに自分の能力に合うところに行けないのはもったいない。その子の人生を変えてしまう事にもなる。
- ・前期と後期の入学者の学力差が著しいから。
- ・試験での一律の入試が公平と思える。パフォーマンスのできない生徒に不利。
- ・募集枠を拡げることはむずかしいとすると、中学生にとって前期選抜に向けて、がんばる意味がほとんどない。

[結局は学力で選抜している]

- ・多様な選択可能性を示しているように見せて、最終的には、中学からの成績で数字の良い生徒を取るの。誰の為の、何の為の入試改革なのか、明確な目的が見えないから。
- ・結局学力の高い子を先取りするだけの制度だから。
- ・現在の制限された前期選抜方法では、学力以外の能力が測定できないと思うから。
- ・学校によっては、学力のみで選抜しているから、早く合格が決まる子とそうでない子が出るから。

[制度の趣旨に疑問]

- ・主旨がよく理解できないし、今の時点ではメリットもデメリットもわからない。むしろ時間の無駄でもあるようです。
- ・後期選抜の際の参考点にならない上、科目も異なるから。小論文(作文)は、後期選抜にも取り入れるべきである。
- ・前期選抜そのものが(不明)適性でない。
- ・入試制度に問題があるから。
- ・中学・高校・生徒・職員、双方の負担の割には、特別評価できるようなシステムではない。
- ・県教委で言っているところのこの制度の主旨自体、妥当とは思えない。教育の商品化は誤りだ。
- ・良い点が見つからない。

[自己推薦にたいする疑問]

- ・自己推薦の意義がよくわからない。中学生の段階でそこまでする必要はあるのだろうか？
- ・中学の段階で自己アピールは無理であり意味がない。
- ・そもそも大学受験と高校受験はまったく違うものであるの、自己推薦である前期選抜は意味がない。
- ・推薦入試に対する中学生の不信感が根底にあるのを更に広げる結果となる。
- ・推薦入試制度そのものに反対です。

[学校間格差、競争]

- ・学校間格差の拡大を招く。
- ・志願者の少ない学校を統廃合の対象としてピックアップする道具に使われそうであるから。
- ・前期試験をしなければ、他校に人材をとられるからという、他律的な観点から、行っている高校が多いのでは？

[入試業務の負担]

- ・問題作成、採点、面接評価、選抜等、無理がある。実際準備の為に時間を使いすぎて、そのほとんどが就業時間以外の時間帯である。
- ・中・高ともに仕事がふえるだけでメリットが少ない。
- ・受験準備が早くなり、中学、高校ともに本業の業務に支障。

[選抜資料の問題点]

- ・説明責任を心配するあまり、通り一遍の面接だけで本当の意欲や適性が判断できない。結局のところ業務を煩雑にただけで、調査書点をたよりに、また、募集の観点を客観化するには数値化するしかないが、とても難しい。
- ・結局内申点がものをいい、のようなメリットは見受けられないから。本当に のようにできるなら賛成。
- ・結局のところ内申順になってしまう。とびぬけて優れたもの、将来へのはっきりした展望を持っている生徒なんて、中学生ではあまりいない。 選ぶにくい
- ・内申書で決めるのなら、面接する必要なし。
- ・実際には調査書重視にならざるをえないから
- ・志願者が多い場合、結局は内申点で左右されてしまう。
- ・面接をしても、調査書で合否が決定するのはおかしいと思う。
- ・多くは調査書の評点が合否の基準であったようであるから。
- ・中学校の成績をたよりに選抜するが(面接では落とせない)、調査書の評定も中学により一定でない。
- ・面接で制限が多すぎる。判定しづらい。
- ・現実的に、面接、口頭試問の結果を、合否に反映させることが難しい。
- ・受験のチャンスがふえたのは評価できるが、選抜の方法に問題があると思う。面接・小論文だけでなく学力検査的なものも課したい。
- ・客観的評価は、当面の所ペーパーテスト以外出来ないと考えるため。
- ・自己推薦文を合否の判定に使えない(使わない)自己推薦入試などサギと言える。
- ・面接・小論文によって何かを(生徒の能力を)検査するのでなく、面接・小論文そのものの能力を求めることにはしないか？
- ・学力検査が充分機能せず。面接によって入学の意志を確認する機会ができる。
- ・中学生はウソの作文を書いてきて入学させたいために教員もそれを見逃している。
- ・学校独自の問題をつくれぬ。県教委の指示ばかりが多く、高校の独自性が出せない。

[学力検査(後期)だけでよい]

- ・ 基本的には学力検査でよい。特別枠は少数募集であってもよいが、前期後期にわかるほどのことはない。
- ・ 平等な判定ができるので、従来通りの3月の学力検査で十分である。
- ・ 後期入試(学力検査)のみで十分

[合否基準があいまい]

- ・ 合否の基準があいまい。
- ・ 合否の基準があいまいである。
- ・ 合格の基準(評価基準)があいまいな為。
- ・ 合格基準が明確でない。
- ・ 合否基準がハッキリせず、後期選抜を受ける生徒にも悪影響がある。
- ・ 合否判断のあいまいさが目立つ、かつ中学生に混乱を招いた。
- ・ 選抜基準が明確でなく、不合格者の不信を招きかねない
- ・ 基準が明確に出せないため、受験者の合否で今年かなり中学でもめた。
- ・ に関連して、不合格者が納得できないから(どうして自分が不合格なのか) に含まれるのかもしれないが……
- ・ 受験生の特色を公平かつ客観的に見極める評価基準づくりが難しいから。
- ・ 中学生に示している募集の観点と合否判定の実態が違う学校があり、不合格の生徒が気の毒。
- ・ 評価基準がわかりにくい
- ・ しっかりこのことについて、客観的な選抜として位置付けられるのか検証してないから。
- ・ 県教委の"しぼり"が多すぎる。県の基準では、合否判定が難しい。
- ・ 選抜方法も不透明。ただ中学生を苦しめるだけだから。

[募集の観点]

- ・ 観点が具体的でないため、特色を出しにくい。中学生も受験しづらいのでは。
- ・ 高校側の募集の観点が一般論、あいまいにならざるを得ない。
- ・ 募集の観点が、もっと改善されれば良い。
- ・ 普通高校の場合、大学等の合格実績以外に、目立った学校の特色がないので、中学生がそれ以外の点で自分に合っている、いないという判断ができないから。
- ・ 学校独自の募集要項を作るといいながら蓋を開ければ何処も似ていて意味がない。将来の目的を決めるのは自己アイデンティティの確立期を待つべし。今のままでは逆に子どもの将来への可能性をつぶすことになりかねない。
- ・ 各校とも募集の観点、合否基準があいまいで現在の中学生にとっては負担になるだけだと感じる。
- ・ 学校の独自色を出して募集することが結果的には難しい。自己推薦と言っても指導の手が入り、皆同じ様な小論文で受け答えも同様である。
- ・ 特殊な競技で合格しても、高校では指導できなかつたり、継続してクラブをやらない者もいる。
- ・ 特色がスポーツにかたよる心配がある。
- ・ 学力と部活動実績という2つの合格基準はおかしい！

[募集枠]

- ・ 募集人員をはっきりさせることが出来ないから(志願者全員良いと思えば全員合格、全員ダメだと思えば全員不合格にしたい)
- ・ 選抜者人数が少なすぎ。
- ・ 県教委指導で30～50%を前期にした方が良い。

[予想外の出願]

- ・ 身の程知らずの成績の者まで応募してくるが(1があっても)、全て面接するのは如何なものか？
- ・ 中学で責任を持てる推薦ではない部分が多すぎる、余りに無責任な出願。
- ・ 専門科にとって目的意識の高い生徒を選べたとは言えない。
- ・ 定員割れしている学校では、長期欠席や成績のついていない子までもとらざるを得ないから(校長がとってくれと言う)
- ・ 中学校により推薦の規準にバラツキがある。(前期をとにかく受けるというところもあるし、前期をすすめないところもある。)

[期待した生徒が入学した]

- ・ 本校の様子を見れば、意欲的な生徒が前期選抜で入っている。本校にとっては意義あることだったと思うが、何段階も選抜されることで、不合格を重ねる生徒の心情を思うと複雑です。
- ・ 本校にとっては、比較的質の良い生徒が入学してくれたため良かった面もある。
- ・ 高校によっては、その評価がわかれると思われる、本校においては の理由から良かった。
- ・ そのためか、学校は(1年生は)落ち着いているから。
- ・ 4通学区制の影響もあるのか、後期選抜を終えた時点で例年より成績のいい生徒が多かったようだから。
- ・ その高校に入学したい中学生が受験してくる。

[評価できる]

- ・スポーツ推薦の生徒をこちらの意向に従って、面接で取ることができるから。(今までのやり方だと、公正感がなかった。)
- ・学校の特色づくりを再考する材料にもなる。
- ・高校側に選択権がある点は評価できる。
- ・昨年まで不合格にできなかったが、今回は選抜し合否が決まるので合理的である。
- ・入学生の中で、前期・後期の競争意識(よい意味で)が生まれるから。
- ・心配な面はあるが、生徒のことを考えた上での改革なら評価できると思う。だがもう少し時間にゆとりを持てるようにしてもらいたい。(さまざまな面で)
- ・リストラ時代の企業努力に類するものとして、やむをえず必要な側面もある。

[必要か不必要かは学校によって違う]

- ・地域高校にとって生徒を集めなければならない事は切実な問題。
- ・地域校にとっては、もしかしたら意欲的な生徒を入学させるチャンスになったのかとも考えるから。しかし、疑問ではある。
- ・学校によっては(専門高校、地域高校等)生徒を募集するチャンスで実質的であった学校も多いのではないかと、各論賛成、総論反対といったところ。ただし、トップ校(いわゆる)のような所での選択はやめるべき。
- ・前期選抜(推薦入試)は、定員割れをして生徒が集まらない学校などには良いことではあると思われるが、すべての学校での実施は悪影響をもたらす。
- ・受験生の集まらない学校には有効。
- ・試験ギリギリまで勉強をして少しでも学力をつけてほしいが、本校ではやらざるをえない状況であるため。
- ・生徒確保上やむなし。
- ・進学校には必要ないのでは、と思うから。
- ・いわゆる進学校での実施は意味がない。
- ・あった方がいい学校と不必要な学校と両方あるから。
- ・スポーツ、文化活動に特色を持たせる高校には利点があるが、それをもとめない高校には特に必要ない。
- ・本校にとって利点はあったが、一斉実施することに意味はないと思う。
- ・職業科を振興するためのものが、全生徒対象になっては意味がなくなる。
- ・広範囲の善光寺平や安曇平には意味があるかもしれないが、伊那谷のような地理条件では必要ない。
- ・定時制では、それなりに意味のある部分があったが、全体枠の中では何も言えない。

[現時点ではどちらともいえない]

- ・まだ、1回しか行ってないので、何とも…。
- ・選抜方法を変えたことによる、過去の生徒との比較が、まだ出来ないから。
- ・まだ、追跡がなされていないので。
- ・まだ、結果が出ていない。その生徒たちが、どう学校生活を送るのか。
- ・現段階では、何ともいえない。前期で入学した生徒が、今後どのような学校生活を送るのか、見届けてから評価がはじめて定まるのでは？
- ・前期選抜で入学した生徒の入学後の生活ぶりを見てから、前期選抜を総括したい。
- ・初年度で成果については何ともいえないから。
- ・前期選抜を経験しておらずよくわからないため。

問3 今年度の前期選抜で多くの受験生が不合格になりましたが、前期選抜を行う場合この点についてどのように考えますか。1つ選んでください。

自己推薦で志願したのだから、不合格であってもやむを得ない	7 2 2 (38.9%)
多くの不合格者を出さないために、募集枠を拡大すればよい	8 7 (4.7%)
多くの不合格者を出さないために、募集の観点をより具体的に記述し、志願者が増えないようにすればよい	4 5 7 (24.6%)
不合格になった理由を納得できるように、合否の基準をよりはっきりと示せばよい	3 9 2 (21.1%)
その他	2 0 0 (10.8%)

【記述】

[多数の不合格は必然である]

- ・こちらで決めた募集枠なので、枠外の人が高不合格なのはしかたない。一般募集枠と同じという意識。
- ・この制度では、やむを得ない。
- ・受検機会の複数化と募集枠の関係から、前期不合格者が多いのは当然な結果であり問題とすること自体が問題だと思う。
- ・この制度は、不合格者がでる。
- ・受験する側も不合格が多くでるのは、わかっているはず。
- ・理由はともあれ不合格はやむを得ない。

- ・この事は、予測できたのでは、それを承知で県は強行したのでは！
- ・「受験機会の複数化」の美名がいわれているが、結局のところ「競争」が激化したにすぎない - - 不合格が多くするのはあたり前(不合格をへらすこと自体矛盾)
- ・不合格はあたり前と考えてほしい。
- ・前期選抜とは、そういうこのだから不合格者の多寡を論ずるのは無意味だと思います。
- ・高校は義務教育ではないので、不合格者があることが当然である。
- ・不合格を出さないようにと考えるのは元々無理がある。だからと言ってこれだけ多くの不合格も今まで慣れていないだけにどうかと思う。
- ・設問の主旨が不明、実施するからには問題は発生し解決の方法はない。結果を悪用しないこと。
- ・入試の本質として、原則は だが、それ以上の判断が難しい。
- ・中学側で評定値を生徒に明示できない以上、前期選抜は必ず多数の不合格者を出すことになってしまう。
- ・どのような方法を採用しても、受験生の心理としては、チャンスが増えるわけだから、志願者は多く、大勢不合格になります。

[廃止する]

- ・前期選抜を実施する以上、大量の不合格者は出ざるを得ない。大量不合格者を出さない為には、前期選抜の廃止以外ない。
- ・前期選抜を実施する以上、不合格者はでる理由なので、不透明な選抜は廃止するしかない。
- ・不合格者数をとやかく言うのなら、この制度はやめるのが当然。
- ・今の制度では、多少いじっても良くなる可能性はないと思う。廃止しかない。
- ・中学生にとってかわいそうすぎる。制度自体を廃止すべきだ。
- ・前期選抜そのものをやめればよい。小論文と面接で勉強を避けて楽に入ろうという発想そのものがダメ。
- ・いずれの方法をとっても学力低下は免れず、廃止すべき。
- ・中学側が望まない入試は、即やめるべきである。
- ・前期で不合格でも、後期にほぼ同じメンバーが受験し合格しているので、いっそ後期のみに戻したら良い。
- ・やるなら80%合格するようにするべき。制度そのものがいらない。
- ・3月まで(学検)前期の準備が出来ず、又、合否の判定後の生徒間の心の痛みなどさまざまな個々の悩みが出て - - この点でも反対
- ・中学卒業程度では、自分の将来を踏まえた選択は無理と思う。その意味で、将来を考慮しなければならない方法は、避けるべきと思う。
- ・制度のもつ根本的欠陥である。前期選抜を廃止するしか方法はない！
- ・前期選抜入試は止めた方がよい。以前の学校推薦型の方がよりベター。
- ・15才での多数の受験の機会はやめるべきである。
- ・普通科は前期選抜をやめることが一番。
- ・前期選抜をやらなければよい。
- ・そもそも、やらないこと！
- ・廃止すべき。
- ・廃止する。
- ・前期は廃止するべし。
- ・行うべきでない。
- ・やめるしか方法はない。
- ・やめればよい。
- ・やめる。
- ・前期選抜の必要性を感じない。
- ・前期選抜を廃止する。
- ・前期選抜を廃止する。
- ・前期選抜をやめればよい！
- ・前期選抜をやめればよい。
- ・この制度をなくす。誰でも受けられるなどと宣伝しない。
- ・多くの不合格者を出すような制度はやめる。
- ・多くの不合格者を出すような制度はなくした方がよい。
- ・前期選抜はやめて一本化する。
- ・前期選抜は何かあっても行わない。
- ・前期選抜をやめれば良い。
- ・前期選抜をやめる。
- ・前期選抜を行わない。
- ・前期選抜自体、やめた方がよい。
- ・前期選抜をやめればよい。
- ・最善の改善策は廃止。
- ・前期選抜を廃止してほしい。
- ・やめる。
- ・前期選抜は必要ない。

- ・やらなければいい。中学の指導レベルによる。
- ・前期選抜は行わないと良い。
- ・なくした方がよい。
- ・選抜制度に無理がある。
- ・募集しなければいい。
- ・この制度そのものをとりやめる。
- ・やめれば良い。
- ・やるべきではない。
- ・前期選抜をやめるべき。
- ・やめた方がよい。
- ・前期選抜をなくしてもらいたい。
- ・自己推薦制を廃止すればよい。
- ・普通科には前期選抜制の必要はない。
- ・前期選抜そのものに反対なので選べない。
- ・前期選抜の制度自体に反対であるので、行う場合こうしたいということはない。
- ・高校受験にはそぐわないので、この部分は当てはまるものはない。
- ・ ~ は、前期選抜を行う前提であるので、前提を認めない限り答えられない。

[学校推薦にもどす]

- ・中学校からの学校推薦にもどすべきだ。
- ・学校長推薦にすべき。中学校から何人などの制限。
- ・自己推薦ではなく、学校推薦とすべき
- ・確かに異常です。学校推薦が何故、悪いシステムだったのかわからない。見直してほしい一つの理由です。
- ・学校長推薦に戻すべきである。
- ・前期選抜は「学校推薦」の形で、中学校が自信を持って推薦できる生徒のみにした方がいい。そして、あまり競争率が高くならないようにすることが大事(せいぜい2倍まで)
- ・中学校長推薦による前期選抜を行い(復活させ)不合格者を出さない。
- ・従来通りの入試制度の方が問題は少ないのではないか。

[改善・見直しが必要]

- ・誰から見ても客観的に判断できるもの例えば基礎学力テストのようなものを全体に課す。
- ・前期選抜でも学力検査をするべき。
- ・前期試験は学力試験にして、個性を合否の基準としない。
- ・学力検査による試験を前期として実施、不合格者に後期試験のチャンスを与えたらどうか。
- ・誰でも、なんでもかんでも出願出来るのが、不合格者を多くし、業務も煩雑になる。もっとシステムを改めるべきだ。
- ・不合格者が多く出るのは当たり前。問題は落ちた生徒が納得するかにあるが、客観的に公平な合否とは受け止められない。国公立大のAOなどのような特別なものにするしか、進学校では手が無いのでは。
- ・中学校長推薦とうまく組合せはできないものか？
- ・入試である以上、ある程度、不合格者が出るのは、やむを得ないかもしれないが、都市部に志願者が集・中するのは予測できることであり、改善の必要がある。
- ・改善工夫が必要である。
- ・前期選抜という制度を見直すべき。
- ・前期選抜、見直し。

[募集の観点を具体的に示す、出願基準を示す]

- ・募集の観点をより一層具体的に示す。
- ・高校側が私立と同じ様に強化したい部分、学習面とかテニス等ははっきりと全面に出しわかりやすくする。
- ・高校の募集の観点をもっと細かく決める方がよいと思う。
- ・ にプラスして最低学力基準を明確に示す。
- ・募集の最低基準を示す必要あり。
- ・枠をもっと少なくして基準を明確にする。 スイセンを縮小する方向で。(自分の学校だけ、先にたくさん取ってしまうとする気持ちが高校にもあるのでは?)以前からある専門学科の推薦も枠を多く取りすぎだと思う。
- ・募集基準を高めにしていくとよいと思う。
- ・募集の観点にかんがみ、足切りをし、約2倍程度まで、選抜可能者をしぼるべきだ。
- ・足切りラインを示す。

[募集枠]

- ・前期選抜の募集枠を拡大して50%位にするといいい。
- ・前期選抜だから定員の半数合格にするという考えは違うと思う。
- ・枠は学校の独自性に任せる。

[合否基準]

- ・ はそのとおりであるが、そうすると、どんなに工夫しても、しよせん形での判定になってしまう。
- ・ だが、実際には、合否の基準などそう簡単に客観化できない。
- ・ 不合格になった理由を納得できるように、合否の基準をよりはっきりと示せばよい。ただし、基準がはっきりできるわけではないので、この方法そのものが問題ありと言える。
- ・ 判定がむづかしい。

[必要な学校のみ実施する]

- ・ すべての学校で行うのではなく、前年度募集定員に満たなかった高校のみが行うようにすればよい。いわゆる進学校では、前期選抜で不合格とされても、後期選抜で合格(前期選抜の時点で、それが想像できる)という事例は、生徒にとっても職員にとっても、利は少ないと思う。
- ・ 長野県のような教育環境では、前期選抜は一部地域高・困難校をのぞき不必要
- ・ 学力もなく、まじめにこつこつ学習する気もないが、自己主張だけはしっかりするような生徒をたくさん集めて、高校の特色としたいとか。すべての高校を平均化したいのであれば、募集枠を拡大すればよいが、東大、京大に行って将来の日本を背負いたいという者や、まじめにこつこつ学習したいという者にとって、学力による選抜は必要。に近いが学校によって、変える必要がある。
- ・ 自己推薦は、必要な学校(生徒の集まりにくい学校)のみでおこない、志望率の高い学校ではすべきではない。
- ・ 都市部の進学校は、学力検査だけでよい。
- ・ 全ての学校で前期選抜はやらなくても良いのでは？都市部(いわゆるC校)には必要ないと思う。

[前期選抜の認識を改める]

- ・ 学力検査では測れない力を見る選抜であるという点を明確にさせることで、志願者がより適切に受検するか否かを判断できるようにしたい。
- ・ それぞれの試験の意味を認識させるべき。
- ・ 前期選抜の問題点を地域、父母と話し合い、前期選抜に対する幻想 = 「受験機会が増えた、チャンスが増した」や過度の期待を払拭し、志願者を少なくしていく。
- ・ 今回は、受験生の余りにも大きな誤解の中で受験が行われた部分がある。十分な説明と、理解の中で多くの不合格者が生まれても、それは仕方ない。
- ・ この制度の問題性を、はっきり示す。

[その他の問題点]

- ・ 「バスに乗り遅れるな」ではなく、各高校があらためて”前期選抜を実施しなければならない理由”を検討、検証することからやり直すべきである。
- ・ 何をしてもいい制度ではない。学校側からは、「いい子どり」競争。公教育の存在意味が問われ、ひいては学校自体が取捨される事態につながる。
- ・ 負担が多いのみで、メリットが少ないように思われる。受験生にとっても今のままではチャンスが増えるということはないと思う。
- ・ 受験生が納得できるいい方法が、今のままの前期選抜を行う限りみつからないと思われる。
- ・ 不合格者が出るのは自己推薦なのでやむをえないが、結局内申重視の入試になり、お互いに労力の無駄。
- ・ 生徒の個性を評価するといっても、全体の合格者数の枠がその分拡大するわけではない。今まで入学出来ていた生徒が不合格になるだけだと思ふ。
- ・ 不合格者を出してはいけないなどと余計なことは一切考える必要なし、合否基準がはっきりしないのと自己アピールがうまい生徒が合格してよいのかが問題。
- ・ 真のやる気のある生徒が合格できるようになっていない。
- ・ 中学生の精神的負担を考えるに、選抜方法の急激な変化は、かなり問題だと思う。導入にあたっては、もっと現状把握、問題点を考え、検討し、先の見通しをもった制度の導入を切に希望する。
- ・ 中学生に対し、大学受験のような自己推薦は不適當。

[中学校の進路指導や中高の連携]

- ・ 中学生の出願が余りに安易すぎる気がする。慎重な出願をするような進路指導をお願いしたい。
- ・ 中学校間連携がとれるようになれば、自然に減ると思う。
- ・ 後期選抜をほとんどの生徒が受けるように中学、高校とも宣伝する。
- ・ 中学側の指導もあるのではないか。しばらくすれば定着すると思う。
- ・ 不合格者が多いのは、仕方がない。(受験生にとっては)問題は、合格者の数(+)倍の不合格者を含んだ受験に対する学校側の負担ではないか。受験校の定数を見ながら志願させてもらいたい。
- ・ 中学校現場の混乱で中学の先生は大変じゃないですか。

[不合格者のケア]

- ・ 「若い時の挫折は、長い人生の内では財産である」中学の先生・親がしっかりケアすることだと思う。
- ・ 不合格はたまたま人数によるもので、その学校がその受験生を拒否したわけではない、ということが受験生に伝わらないと、再受験にためらいを覚えてしまう。

[わからない]

- ・ わからない
- ・ わからない
- ・ どうしたら良いかよくわからない。
- ・ 前期選抜の評価の仕方が難しい。

[何回かやれば落ち着く]

- ・ 前期選抜を何回かやって中学生が落ち着いてくれば状況は変わるのか？
- ・ 今年度は昨年度の様子から、希望する受験生が大幅に減少するのではないかと思う。

[その他]

- ・ だれでもが受験できるということは、可もあり不可もある。
- ・ 本人に考える力がつく。

問4 今後、前期選抜をどうすべきだと考えますか。1つ選んでください。

廃止する	1 0 0 7 (51.6%)
改善しながら続ける	8 0 2 (41.1%)
このまま続ける	2 3 (1.2%)
その他	1 2 1 (6.2%)

【記述】

[廃止・中止する]

- ・ 全く不必要
- ・ 百害あって益なし / 前期選抜を続けると学力崩壊を加速します。
- ・ 今のままの形なら廃止、学校推薦とする場合は検討。
- ・ 改善されなければ廃止。
- ・ 具体的な改善策ができるまで中止。
- ・ 一旦止め、検討を続けよ。
- ・ 明確な判定基準ができないのであれば、廃止した方が良いと思う。受験者をはじめ、その父母たちに疑問と不満を持たせるだけであるから。
- ・ 前期選抜で入った生徒がいるので、お前たちの入り方はまちがいだとは言えない。だからすぐにはやめられない。少しやって、終りにできるよう流れを作っていくしかない。
- ・ 廃止にし、前後の要素を一つにした試験とする。
- ・ 入試手当も満足に出ない高校入試は一律に一本に統一し、テスト一回きりにして選抜してほしい。

[問題点あり]

- ・ 問題点が多すぎる。
- ・ 他県はすべて失敗しているとの結論である。
- ・ 前期選抜合格者が高校入学後、必ずしも学習状況が良いとは言えない。
- ・ ただ、辞退できてしまうので、その点が多く不合格者にとってはかわいそうな点である。今の制度では補欠合格が出せない。

[学校推薦にもどす]

- ・ 中学校の先生方が、これでよいというのなら、受け入れましょう。中学の先生とその生徒の関係、あるいは、中学サイドと保護者との信頼関係がくずれていくとすれば、見直すべきでしょう。高校側が、様々な募集の観点を設けても、学力に関しても、適性に関しても、人物に関しても、単時間では優劣をつけにくいのである。3年間という時間をかけて生徒を指導してきた中学校の先生からの推薦という形の方が、確かであると思うのですが。
- ・ 15年度までの推薦入試にした方がよい。今年度の2日間で実施した学校があるのに、それが終了以前に17年度実施日を、連休前日の1日のみと発表できることでさえ馬鹿げており、呆れている。・ 県教委は、2 / 11 ~ 13(日)の間に選抜業務をせよというのか、高校生の授業日数を削減せよというのか明確にすべき。
- ・ 自己推薦ではなく、学校推薦にすべき、従来(一昨年以前)と同じではなく、高校で選抜する。(不合格の生徒はあるが、現状よりも少なくなる)
- ・ 以前のように学校長推薦にする。
- ・ 一昨年度の形にもどす。
- ・ 学校推薦に戻すべき。
- ・ 前の形(昨年まで)にもどす方がよい。
- ・ 地域校、職業高校のみの以前の形。

[改善が必要]

- ・ 続けるなら、もっと抜本的改善が必要。
- ・ どれともいえない。続けるなら改善しながらの
- ・ 改善は必ず必要。
- ・ 大幅な改善が必要。

- ・改善して行う。
- ・大幅に内容を見直し、推薦入試は続けてもよい。
- ・廃止は安易な結論、生徒の多様性を評価しようとする姿勢は良い。何とか問題点の改善を図りつつ進むべきだと思います。
- ・改善しながら、少し様子を見る。ちよくちよく変わるのも良くない。しかし、現行のものは問題点が多く、改善の必要はある。
- ・日程、募集人員など改善する必要あり。
- ・業務が増えない形でやるならやればよい。例：県教委がすべて準備、採点も県教委、マークシートによる試験、採点は機械で行い判定のみ高校にまかせる等、各高校は、それプラス何か特徴のあるものを課す。
- ・客観的に可否が判定できる問題作成が認められれば良い。
- ・続けるなら、各学校が試験内容も含め、自由に採量できるものにする。
- ・学力検査を行う。2回の学力検査で前・後期とも選抜する。
- ・受検機会を2回与えるのであれば、学力検査を2度実施する方がよい。
- ・前期選抜を学力検査で行えないか？
- ・従来の学検に面接を加える。
- ・前期後期ではなく、一次二次で全員面接全員学検。
- ・前期を学力検査、後期を自己推薦とすべき。
- ・通学区を拡大させた状態では、受験生の負担軽減にはつながらない。本格的な改革が必要。
- ・前期への出願数を「各中学5名まで」などのように枠をはめる。
- ・枠をせばめて改善をはかったらどうか。
- ・本当に特色のある子のみを合格させる。
- ・特別枠少数募集として、特別な力をもつ子供(スポーツ、ゲーム、伝統芸能etc)を受け入れることはよいと思う。
- ・絶対不動な目的を確立し、専門科ではなくどうしてもこの学校に入学したいという固い意志を持った生徒だけに許される、極めて少数の特例といった意味合いを持つ制度としてなら前期選抜は有意義かと思えます。

[必要な学校のみ実施する]

- ・希望の学校が希望の方法で実施する。
- ・必要な学校のみ実施。
- ・自分の学校に”売り”がない学校はやめるべき。
- ・各学校にまかせる。実施しない学校に圧力をかけない。
- ・何とも言えない。自己推薦の必要のない学校もあると思う。
- ・各学校にまかせる、必要なところはやれば良い。
- ・学校の判断による。
- ・「ほぼ全校実施」ではなく、実施する、しないを各校で再検討すべき。
- ・現実には廃止するのは困難だろうが、離脱を含め学校が独自判断しやすい環境を整える。
- ・人員確保の困難な地域高校のみ認めるべき。
- ・地域高校などを中心に改善しながら存続する。過度の受験競争をあおるだけでなく、自分に合った高校にすんなり入学できることも生徒によっては必要ではないかと思う。
- ・専門高校、地域高校に限定し、原則C校は前期選抜をしない。
- ・都市部進学校では不要、判断基準があいまいで、かえって不公平。実業校、地域校では必要。全県一律にほとんどの学校が導入する必要はない。
- ・以前の工業科(職業科)と、地域校の方がよい。
- ・地域校である本校にとっては面接による自己推薦選抜は、やる気のある生徒を集める意味で大いに成果があった。しかし、県下全ての高校でやることではない。定員割れのおきやすい地域校、辺地校のみの実施を希望、他校は遠慮せよ！
- ・前期選抜をやってはいけない学校(M・F高校とか、S・S高校とか、N高校とか)を指定し、地域高校・職業高校だけに許す。
- ・進学校はやめる。中～下の学力の学校は行う。
- ・普通科については、廃止した方がよいと思うが、職業科等については、検討する余地があると思う。
- ・コース制など、特色ある科や募集の対象が普通とは違う学校のみ実施すべき。
- ・希望するほぼすべての高校ではなく、本当に特色づくりとしてビジョンが明確な高校のみ行うのが、本来のあるべき姿と考えます。
- ・制度がうまく機能している学校では続け、そうでない所は廃止するか改善する。
- ・学校によって廃止した方がよければ廃止、前期選抜を行わないことも、積極的選択であり、学校の特色であるということを訴えるべき。続けた方がよいとする学校もそれぞれ改善する必要があると思います。県が現場に対して拙速にならざるをえない指示を出しすぎ。選抜についても県は、いったい事前の研究をどの位しているのか？疑問を感じます。受検生や保護者へのアンケートも大変でした。県で集計してほしい。

[あらためてよく検討する]

- ・多くから実施について意見をもらい決定を！！
- ・検討の結果、続けるにふさわしいということになれば続けてもよいのではないかな。
- ・県教委が十分この制度を検討する必要あり。

- ・日本の教育の未来は、どうあるべきか考えれば答えがでるか。
- ・廃止も念頭に再考する。
- ・よく話し合っ
- ・高校側の努力や決断でやめるのは無理。「特色づくり」競争になげこまれている中で自分の学校だけやめるのは困難。県民世論、特に中学の先生や父母の声が重要、そのためのネットワークを早急に強めるべき。
- ・問題点の総括をしてから(高校、中学、保護者)すすめていかなければならないと思う。
- ・更なる議論が必要だと思われる。学校 - 生徒 - 保護者間で意識が統一できるように。
- ・1年やっただけで即廃止というのでは中学生も対応しきれないだろうと思われる。今年度のような拙速な変革を避け、検討を加えつつより良い方向を探るべきではないか。(改善しつつ検討していった結果廃止ということもありうる)
- ・まだ、よくわからない。議論の必要あり。このままでは、現場の混乱が大きい。特に、中学校・中学生が大変である。
- ・よく検討して続けるかどうか決める。
- ・問題点について徹底的に話し合い、廃止も含めて検討していく必要がある。今回の前期選抜の導入は、あまりにも軽率であったと思う。
- ・もう少し慎重にデータを集める必要がある。
- ・根本的に長野県教育の将来についてしっかり考えないと長野県教育に未来はない。その意味において入試制度そのものを再検討すべき！！
- ・「15の春を泣かさない運動」もそろそろ考えなおす時期では？現在の内容では今泣かなくても、何年後によりひどい泣きを見る事になるだけだと思います。
- ・高校側に考える時間がない。長期休業中に検討会を開くなど、全職員で考えるべき。また、新しい募集観点が考えられず、近隣の真似をしている感がある。選び出せる能力と選んでもらえる魅力を出すことができない。
- ・効果を検討してから。

[数年様子を見て判断する]

- ・2～3年は様子を見て判断したい。
- ・2,3年続けて総括し、判断を！
- ・しばらく様子を見て判断。
- ・1,2年続けて様子を見る。
- ・3年くらいは続けて、追跡を行い、検討を加える。
- ・改善して続けながら、何年後かに総括して進退をハッキリさせる。
- ・改善しながら続けるかも検討すべき。
- ・改善して続けて見て、良くなければ止める。
- ・2～3年様子を見て総括後、早急に廃止なども考慮しながら検討する。一回はじまってしまったものを、そうは簡単に変えられない。
- ・まだ1回だけなので前期で入学した生徒がどのような活躍をするのかわからない。3年くらいやってみてから、やめるならやめる、それまでは改善しながらやるしかないと思う。
- ・受験機会の複数化の方向は評価してもよいと思うので、選抜の方法等を2～3年後に再検討する。
- ・前期選抜で入学した生徒の追跡調査をしてから考えたい。

[判断できない]

- ・わからない。
- ・なんとも判断しがたい。
- ・今の段階では何とも言えない。
- ・まだ、始まったばかりであり、なんとも言えない。
- ・1年だけでは結果は出ないし、わからないと思う、けっしてよいとは思っていないのだが。
- ・まだ、初年度でもあり評価するには早いのでは。
- ・まだ結論が出せない。
- ・どちらとも言えない。改善の内容にもよる。
- ・どちらともいえない。
- ・問2に上げた理由で、判断がつかない。
- ・選抜方式議論より高校統廃合の方向性が先に出不いと対応を考えにくい。

[やめられない]

- ・一度始めてしまった制度は簡単に止められない。
- ・続けざるを得ないのかと思う。
- ・はじめたのだから続けるしかない。
- ・仕事が多くなり、大変だが、廃止はまずい気もする。

[必要である]

- ・知識のみで評価するアチーブテストは限界に来ている。少子化時代の子供にさまざまなたくましい能力をつけ伸ばしてやるきっかけにするために必要である。
- ・本校にとっては、プラスだったと考えられるので。

[導入が拙速]

- ・急にこういう方法が出されて、ロクに議論の時間もないままに実行されたということ事態がおかしいと思います。
- ・導入したい学校はやりなさいという県の姿勢が汚い。もっと正面から様々な問題を解決する姿勢を示してほしい。
- ・性急な制度変更を生徒・現場・保護者に押しつけたことを県は反省すべきだと思う。インフルエンザ対策が必要では。
- ・県は多忙を極める現場の状況を鑑みて欲しい。
- ・今年は検討できないままの実施となったのは納得しがたい。
- ・そもそも、十分な検討をしないで導入すべきではなかった。せめて、1年ぐらい論議すべきであった。本来はもう一度廃止して、やり直すべきであろう。しかし、それでは県民から非難されるから、やめる勇気はないであろう。しかし不公平な、いい加減な入試は続くことになる。一年、検討して、今年導入した学校は賢明である。それに比べて、適当に導入した都市部校は非難されるべきだ。中学校や中学生は本当にかわいそうだと思う。
- ・「特色ある学校づくり」を目指すならば募集の観点を極端化して、本当に必要な人材を得るべき。特になければ前期はしない。また、今回の入試制度の導入・継続(特に継続)については、まだ入学していない3月の段階で「来年度の前期をどうするか」という話し合いがあった。実際に我々の選んだ生徒が我々の求めた生徒だったのかを見極める前にする話しではないと強く感じた。世論と現場、更に中学生の意見もふまえて再考する必要がある。「こうなりました。さあ、やりなさい。」という手法では、納得もいかないし、支持もできない。
- ・前期選抜導入以前の入試制度でよいとは全く思わないが、それを改善するための方法としての前期選抜制度は、混乱を招いただけという結果になってしまったと思う。県主導の入試改善案ではない組合独自の改革案は出せないものか。
- ・問2に答えたように、学区制に一定の成果が見られたら、その後に検討すべきだと思います。

[中学校の進路指導への要望]

- ・変な期待を持たせない(高校側は少しでも学習する生徒、生活指導のない生徒をもとめる)。学校間の特色がない現状では、ただ単に学習面が強調される。学習もしない生徒が高望みするのはおかしいことを教えるべき。
- ・中学でも自己推薦出願条件を整備する。

「前期選抜に関するアンケート」の分析

1. 学校アンケートについて

(1) 前期選抜への対応(問1～問7)

今年度(2004年度)前期選抜を実施した学校のほとんどが来年度(2005年度)も同じ形式で実施し、一部の学校では選抜資料や募集枠を一部変更して実施します。(問1、問2)

これらの学校の多くは、「意欲がある生徒、個性的な生徒、志望動機が明確な生徒の入学が期待できるから」という理由で、実施を決めています。また、昨年度まで推薦入試を行ってきた学校では、「(推薦入試と)同様の効果が期待できるから」という理由で実施を決めたようです。「周辺の学校が導入を決め、本校で実施しないと「優秀な」生徒が他校に進学してしまうから」は「意欲がある生徒、個性的な生徒、志望動機が明確な生徒の入学が期待できるから」と表裏一体で、複数回答であればもっと多くなったものと思われます。現場の感覚からすれば、このような意識は多かれ少なかれの学校にもあり、実施の決定に少なからず影響したと考えられます。(問5)

また、来年度新たに実施する学校が数校ありますが、実施を決めた理由は「周りの多くの学校で実施したから」「管理職からの指導」「今年度定員割れしてしまったため」など必ずしも積極的なものとはいえません。(問1、問3)

一方、今年度も来年度も実施しない学校では、「メリットよりデメリットが予想される」「合否基準について明確で客観的な入試方法とはいえない」「現在の前期選抜の試験内容では、その生徒を判断することはできない」など、前期選抜の難しさや予想される弊害が主な判断理由となっています。(問1、問4)

前期選抜の導入について、職員会で「十分な議論を尽くすことができた」という学校は全体の3分の1でしかありません。大きな制度変更にもかかわらず、議論が充分になされなかったのは、各学校での実施の是非について、県教委から短時間で態度決定が求められたためといわざるをえません。(問6)

(2) 今年度の実施状況(問8～問14)

『志願理由書』は「面接の質問内容に反映させた」ところがほとんどです。「提出させたが、合否判定にいいし考慮しなかった」というところもありますが、これは全く利用していないものと思われます。『志願理由書』は、教員などの助言を受けながら書かれると考えられるので、合否判定の直接の資料とすることは難しいですが、提出を求めながら全く利用しないのは問題です。また、「合否の判定基準に一部用いた」というところもありますが、どのように利用したのか、気になるところです。(問8)

『面接』の問題点としては、「短時間の面接で評価するのが困難だった」「面接官によって評価が分かれた」という学校が多く、短時間で有意義な情報を得ることの難しさや、客観的で公平な評価の難しさが表れていま

す。(問9)

『小論文・作文』の問題点としては、「評価の基準づくりが困難だった」「客観的、公平な評価が困難だった」という学校が多く、『面接』と同様に、評価の難しさが表れています。また、これ以外に、問題作成の難しさや負担の大きさ、開示への配慮なども指摘されています。(問10)

『調査書』については、多くの学校が「学習の記録の評定値のみ点数化し、特記事項の内容も(点数化せずに)合否判定に利用」していますが、「特記事項を点数化して用いた」学校も少なくありません。出欠の記録や特別活動の記録などの点数化は、点数化の基準自体に合理性がないだけでなく、本来自主的に取り組むべき活動への影響なども懸念されます。一方、「学習の記録の評定値のみを用いた」学校もあります。これは、特記事項などを客観的に評価することが難しいためと思われるが、中学校側からはどのように映るでしょうか。(問12)

合否判定は、「あくまでも『募集の観点』を合否判定の基準にした」学校がほとんどですが、『募集の観点』に記述していない要素の「基準」をあらかじめ設けて、合否判定した学校や、「甲乙つけがたい受験生の判定には『募集の観点』、事前に設けた「基準」以外の要素も加えて合否判定した」学校もあります。これは、『募集の観点』や合否基準についての事前の検討が不十分であったことや、『募集の観点』だけでは受験生に差がつかない状況を反映していると思われる。(問13)

前期選抜で入学した生徒の印象については、「現時点ではわからない」がほとんどです。正確に判断するには3年間の追跡が必要でしょう。また、「学校生活に意欲的に取り組む生徒が多い」という印象を持った学校もありますが、昨年までの選抜方法なら合格できなかった生徒なのかどうかということの考察が必要です。前期選抜で入学した生徒のその後については、適当な時期にきちんと総括して外部に説明することが、各高校に求められるでしょう。(問14)

(3) 制度変更の功罪 (問15)

各高校にとっての制度変更の功罪について、良い点に関する記述は少なく、ほとんどが悪い点に関するものでした。それぞれの、主な内容は次の通りです。

[良い点]

- ・ 地域高校など定員割れしそうな学校ではメリットがある。
- ・ これまでと比べて意欲的な生徒が入学した。

[悪い点]

- ・ 拙速な導入が現場を混乱させた。各高校では、実施の是非をはじめ、具体的な方法についても十分に検討する時間がなかった。
- ・ 来年度についても、今年度の総括をきちんとする間もなく、決めなければいけない。
- ・ 入試業務が大幅に増加し、授業や進路指導など通常の教育活動に支障があった。また、職場の多忙化が進み、小論文作成者や係など一部の職員の負担は特に大きかった。
- ・ 面接や小論文で募集の観点に合っているかどうかを見極めることは難しく、評価も難しい。
- ・ 面接、小論文・作文、調査書では、公平な合否判定は難しい。
- ・ 安易な出願や募集の観点からかけ離れた出願が多く見られた。
- ・ 前期が不合格になった生徒のなかには、安全志向で後期は他校を受検する生徒がいる。また、再募集を行った学校では、前期・後期とも不合格になって深く傷つき、再募集で合格してもそれを引きずる生徒がいる。
- ・ 前期合格者の学力が心配である。学校全体としても学力が低下するのではないか。
- ・ すべての学校が実施すれば、学校間格差が広がる可能性がある。
- ・ 募集枠や選抜方法などについて、県教委の指導が入り、学校の思い通りにできなかった。

2. 個人アンケートについて

(1) 前期選抜の評価 (問1、問2)

前期選抜の評価については、「評価しない」が過半数の56%で、「評価する」の約5倍となっています。(問1) 評価しない理由として最も多かったのは、「面接・小論文などでは公平・客観的な評価はできないから」です。このことは、評価という選抜の核心部分において、公平性や客観性を確保することが難しいということを示しています。次に多いのは、「入試業務があまりに煩雑で、在校生への教育がおろそかになるから」です。入試業務に非常に多くの時間が割かれ、授業カットなど教育活動への影響が避けられませんでした。また、入試業務を勤務時間外にやらざるをえない状況も生まれました。(問2)

次に受験生に関わる理由が3つ続きます。まず、「中学生にとって受験競争の緩和につながらないから」は、高い倍率や多数の不合格を見れば、当然の見方といえます。前期選抜を見れば、競争は激化したといえます。次に多いのは「中学生には不合格体験による精神的な影響が心配されるから」です。中学生にどのような影響を与えるかということは、選抜方法を考えるときの最も重要な観点の一つですので、この点については十分な検証と議論が必要です。また、「学力検査を課さないため、学力低下を招くおそれがある」と心配する人も多いです。(問2)

高校への影響としては「学校間競争をあおり、学校間格差が鮮明になる」と考えている人も少なくありません。(問2)

その他の「評価しない理由」の主な内容は、次の通りです。(問2【記述】)

- ・ 拙速な導入が学校現場に混乱をもたらし、受験生や保護者に動揺を与えた。
- ・ 昨年度までの学校推薦のほうがよい。
- ・ 後期でも確実に合格するような生徒が前期で合格するので、二段階選抜の意味がない。
- ・ 前期で不合格になると、後期はその学校をあきらめてしまうことがある。
- ・ 多様な尺度といっても、調査書の評定(内申点)で決まり、結局は学力重視になっている。
- ・ 合否基準があいまいで、受験生が合否結果に納得できないことがある。
- ・ 特色が出しにくく、募集の観点があいまいにならざるをえない。
- ・ 部活で募集した場合、高校で指導できない場合や、途中でやめてしまうことがある。
- ・ 募集枠は上限であるので、合格させたい受験生でも定員で落とさざるをえない。
- ・ 出願者が高校の期待した生徒とは違った。
- ・ 中学生にとって受験準備の負担が大きい。
- ・ 中学生に過度の期待を抱かせる。
- ・ 中学生に自己推薦や自己アピールは無理がある。
- ・ 中学校において、前期発表後のクラス運営や授業がやりにくい。
- ・ 中学校教員の受験指導や入試業務の負担が増加した。

一方、前期選抜を「評価する」と答えた人は約1割です。その理由として多いのは、「目的意識をもち、志望動機が明確な生徒を選抜できるから」と「学校の特色づくりをすすめることができるから」です。これらは、県教委が前期選抜を導入した理由と同じですが、現時点では実感というよりも期待感だと思われます。(問1、問2)

また、前期選抜の評価について「どちらともいえない」とした人が約3割います。【記述】の内容から判断すれば、その主な理由は次の二つであると思われます。一つは、「まだ1回しか行っておらず、また、入学した生徒の追跡をしないと分からないから」というもので、もう一つは、「学校によって前期選抜が必要な学校と必要でない学校があるから」というものです。後者については、「地域高校や専門学科(職業科)などでは前期選抜をおこなう意味はあるが、都市部の進学校では意味がない」という見方が多いようです。(問1、問2)

(2) 多数の不合格について(問3)

前期選抜で多くの不合格者が出たことについて、約4割の人が「自己推薦で志願したのだから、不合格であってもやむを得ない」としています。これは、「学校推薦と違い自己推薦は不合格になることがあり、それを覚悟して受験したはず」という見方と、「受験機会の複数化と募集枠の関係から前期不合格者が多いのは当然」という見方の両方があるものと思われます。

次に多いのは「多くの不合格者を出さないために、募集の観点をより具体的に記述して志願者が増えないようにする」です(25%)。評定値の最低基準などの出願要件を示せば、志願者を確実に減らすことができますが、はたしてそれが好ましい方向であるのか、十分な議論が必要です。

「不合格になった理由を納得できるように、合否の基準をよりはっきりと示せばよい」も約2割あります。合否の基準を示すことは必要ですが、どのような形で示すのが課題でしょう。

一方、「多くの不合格者をださないために、募集枠を拡大すればよい」と考える人は5%しかいません。問題の多い前期選抜の枠をこれ以上拡大することは好ましくないと考えているのではないのでしょうか。

「その他」としては、「前期選抜の廃止以外ない」「従来の学校推薦の形に戻す」「地域高校など必要な学校のみ実施する」「安易な出願をしないよう中学校で指導する」「中学の先生・親が不合格者をしっかりケアする」などの意見があります。

(3) 前期選抜の今後について(問4)

「廃止する」が52%、「改善しながら続ける」が41%で、「このまま続ける」は1%にすぎません。ほとんどの人が、廃止または改善を求めています。

「廃止する」が半数を越えた背景には、新しい制度が拙速に導入されたことや、実施して様々な問題が発生したことがあります。具体的には、問1で示されたように、「拙速な導入による現場の混乱」、「客観的な評価の難しさ」、「入試業務による学校運営への影響」、「受験競争の激化」、「不合格による精神的な影響」、「学力低下の心配」などが判断の根拠になっているものと思われます。廃止して学校推薦に戻すべきだという意見もあります。

「改善しながら続ける」は、抜本的な改善を求める声が多いようです。「廃止」ではなく「続ける」としたのは、積極的に評価してというよりも、始めてすぐにやめれば新たな混乱が生じるという判断が働いたものと思われます。

「その他」としては、「2～3年様子を見て判断したい」や、「地域高校や専門学科(職業科)など必要な学校だけに限定して実施する」などがあります。

まとめと提言

(1) 拙速な制度変更による学校現場の混乱について

今回の新しい選抜方法は、昨年1月に県教委から『長野県立高等学校入学者選抜方法の改善(基本方針)』(以下『基本方針』)の案が突然示され、それから一月程度で各高校に実施の是非についての回答が求められました。このため、大きな制度変更であるにもかかわらず、十分な検討や議論がないまま実施を決定した学校も少なくありません。また、その後の準備の段階でも、県教委から急に指示がきたり、変化したりすることがあり、現場が振り回されました。県教委自身も、基本的なことの確認や細部の詰めが十分にできていなかったことがわせます。

選抜方法の改善にあたっては、2003年度まで制度をきちんと総括し、学校現場や県民の意見を広く聞きながら、学校関係者も関わる形で改善の方向を慎重に検討すべきでした。十分な検証や議論を欠いた拙速な導入は、学校現場に大きな混乱をもたらしただけでなく、中学生や保護者に多大な不安と動揺を与え、入試制度への信頼を揺るがせたといえます。

(2) 『募集の観点』について

各校の『募集の観点』は、学科の適性を除けば、「高い学力や学習意欲」、「学習以外の諸活動の実績や意欲」、「良好な生活態度」を求めるといった点で共通していました。どの学校においても教育目標を達成する上で期待する要素は同じであり、「良い生徒」の取り合いが表面化したといえます。

『募集の観点』が曖昧なので、もっと具体的に示してほしいという要望があります(中学校長会『「前期選抜」にかかわるアンケート結果』など)。今年度の選抜において、調査書の評定値や特別活動の記録などについて出願の最低基準をホームページや入試説明会で具体的に示した学校がありますが、このような出願条件の提示は、前期選抜に限られた生徒のためだけの機会にしてしまいます。すべての受験生に等しく2回のチャンスを保障しないのであれば、「前期」という位置づけ自体が意味をなさなくなります。県教委のアンケートの、「『募集の観点』をどのようにすればよいと思いますか」という問に対する回答は、「**志願者が自分の興味関心や能力が志望校の募集の観点に当てはまるかわかるように、もっと具体的な内容にした方がよい**」(高1生47%、保護者55%)が、「**不合格者があまり多くならないように、ある程度具体的な志願条件を示した方がよい**」(高1生37%、保護者38%)を上回っています。また、「**多くの人たちが志願できるように大まかな内容にした方がよい**」という回答も高1生では16%あります。

高校は公教育の場ですから、最低限の要件さえ満たしておれば誰でも受け入れて、その教育に全力を尽くすということがその使命だといえます。学校が「求める生徒像」を提示して特定の生徒だけを選抜するということは、公教育の場として許されるのでしょうか。『募集の観点』は、学校の「教育目標(育てたい生徒像)」、「指導方針」、「学科の適性」などを具体的に分かりやすい形で示す方向が望ましいと思われる。

また、部活動を『募集の観点』にした学校では、高校で指導できなかつたり、途中でやめてしまつたりすることがあるようです。特定の活動の継続を観点とすることについても、議論が必要です。

(3) 選抜資料と合否判定について

『志願理由書』

多くの学校では、『志願理由書』を「面接の質問内容に反映」させています。一方、面接に利用しなかった学校もありますが、県教委の説明が「**主に面接の参考資料として、募集の観点に合致するかどうかを確認する**」(中学生用Q&A)となっていただけに、受験生から不満の声も聞かれました。合否判定に用いた学校もあれば、いっさい考慮しなかった学校もあるという状況は、受験生や中学校を戸惑わせました。

中学生は書く内容に悩みながら相当な時間をかけて書いており、また、中学校でもその指導に多大な時間を費やしていることを考慮すれば、全く利用しないのであれば提出を求めるべきではありませんし、提出を求める場合には、その利用のしかたについて、事前に説明すべきでしょう。また、その形式や量についても、中学校側の意見を参考にしながら、改善する必要があると思われる。

『面接』

短時間(10分程度)の面接で、受験生の個性や意欲を見極め、募集の観点に合っているかどうかを判断することは、ほとんど不可能に近いというのが、多くの教員の感想です。評価についても、面接官によって評価が分かれるなど、客観的な評価の難しさが現れました。面接会場・面接官が異なる受験生の間で公平性を確保することも難しかったといえます。

また、質問事項など面接の内容が適切であったかどうかについても、検証が必要です。

『小論文・作文』

評価項目や評価基準を細かく決めても、それにもとづく評価には主観的な要素が入るので、客観的な評価は難しいというのが実態です。また、実際の評価では、受験生にほとんど差がつかないようでした。

内容に関しては、「総合問題」(複数の教科に関わる内容で、高度な学力を試す問題)と言ったほうが相応しいようなものもありました。「(前期選抜は)学力検査を行わず」(中学生用Q&A)という県教委の説明と矛盾しないでしょうか。この点について、県は明確な指針を出すべきでしょう。なお、このような「総合問題」型の小論文では、中学校の学習指導要領を逸脱した出題があり、中学校側から批判されました。県教委の説明では、「(小論文は)中学校での毎日の学習活動を積み重ねていけば書ける内容です」(中学生用Q&A)となっています。

「総合問題」型の小論文の実施は、学校独自入試を求める姿勢とも受け取れます。十分な議論もないまま学校独自入試が行われるようになることを懸念します。

一方、標準的な小論文や作文においても、そのテーマや内容について批判された学校もありますが、批判の

内容をよく検討する必要があります。

『調査書』

学習成績以外の特別活動などの記録を公平に、そして客観的に評価することは難しく、それを合否判定にどのように利用できるかで苦慮している様子がうかがえます。多くの学校では、特別活動の記録や出欠席の記録など学習成績以外の事項について、点数化せずに合否判定に利用しましたが、その場合はボーダーの判定に使うなど限定的な利用だったと思われます。一方、特別活動や出欠席の記録などを点数化して利用した学校もあります。これは、学習成績以外の事項もできる限り客観的な形で評価に入れたいということでしょうが、点数化の基準に合理的な根拠があるわけではありませんし、本来自主的であるべき活動への影響も心配されます。特別活動だけではなく、出欠席の記録まで点数化した学校もあるようですが、これらの点数化は問題であるといわざるをえません。

一方、学習成績の記録は、昨年度より絶対評価(目標に準拠した評価)が記されるようになりました。中学校ごとにつけられた絶対評価を同列に扱うことに、公平性という点で疑問を抱きながらも、そうせざるをえないというのが現場の本音でしょう。合否判定で重みを持つ部分であるだけに、この点についても議論が必要です。

合否判定

面接や小論文は客観的な評価が難しく、その評価は差がつきにくい。調査書の評定は絶対評価であり、また、特別活動などの公平な評価も難しい。このような資料を用いて、いかにして客観的で公平な合否判定を行うか、各学校とも苦慮しています。また、県教委のアンケートによれば、「合否の判定結果が予想外であった」と感じた高1生(受験生)が40%もあり、合否基準について説明を求める声も少なくありません。不信感を招かぬよう、合否判定の基準について、外部への一定の説明が必要でしょう。

実際の合否判定の状況は、面接や小論文では差がつかず、調査書の評定が合否を決めたという学校が多いようです。「志願者の多様な個性を評価」(中学校用Q & A)といっても、実際には難しく、結局のところ学力(調査書の評定)で合否が決まるというのが、多くの学校の実状といえそうです。

(4) 入試業務の増加について

入試業務が大幅に増加したために、学校運営に支障をきたしました。特に前期選抜の前後は、授業カットなど在校生の教育に影響が出ました。また、大学進学者の多い高校では、センター試験直後の時期と重なり、出願先の相談や二次対策など3年生への指導にも影響が出かねない状況でした。

また、通常の業務に加えての入試業務で、勤務時間外にそれをせざるをえない状況も生じました。職場の多忙化が一層進んだといえます。中でも、入試業務の中心となった職員の負担は、特に大きかったといえます。

なお、中学校でも同様の状況が報告されています。

(5) 学校による状況の違いについて

前期選抜を実施する意味合いは、学校の置かれた状況によって違いがあります。地元の生徒が都市部に流出してしまう地域高校や、中退者の多い高校などのように、前期選抜を積極的に生かしたいと考えている学校もあれば、都市部の大学進学者の多い高校のように、学校間競争の中で「乗り遅れるな」という意識から前期を実施したところもあります。

昨年度までの学校推薦は、普通科については地域高校など一部の高校に限定されていましたが、今回の自己推薦はすべての学校で可能となり、ほとんどすべての高校で実施することになりました。その結果、『募集の観点』、募集枠の大きさ、出願倍率などに、学校間格差が表面化することになりました。地理的条件や教員数など、もともと公平でない状況に置かれた学校に「生徒集め競争」を促すことは、学校間格差を拡大するおそれがあります。高校改革プランによる統廃合の心配があるだけに、地域高校など生徒募集に苦労している学校では危機感を抱いているところが少なくありません。

このような状況をふまえて、すべての高校で一律に実施するのではなく、地域高校や専門学科(職業科)に限定して実施したほうがよいという意見も少なくありません。このような方向は検討に値するものと思われます。

また、前期選抜を実施しない学校では、各方面から実施を求める声が集中しているようですが、実施の是非についてはあくまでも学校の主体的な判断にまかせるべきで、一律実施をせまるようなことがあってはなりません。

(6) 中学生への影響について

前期選抜での多数の不合格

今年度の前期選抜は、公立全体の倍率が2.4倍となり、7381名の不合格者を出しました。

通学区検討委員会の報告(2002.3)には「**過度の受験競争を避けるためにも、多様な個性を評価できるような様々な入学者選抜の方法を工夫し、推進すること**」という要望が書かれています。今回の入学者選抜方法の改善はこれを受けてのものでしたが、高い倍率や多数の不合格者など、現実はそのねらいと逆になっています。

定員を前期と後期に分割し、前期の定員を小さくすれば、特別な出願条件を設けない限り、前期で多数の不合格が出ることは必然です。「受験機会の複数化」(二段階選抜)が競争の激化をもたらしたといえます。倍率の高い学校では、前期の合格者は後期でも確実に合格するような生徒ですし、不合格者も多くが後期で合格します。「受験機会の複数化」といえば誰にでもチャンスが広がるような印象を抱かせますが、現実には、それを生かせるのは限られた生徒だけであり、多くの生徒は不合格を体験するだけです。

また前期不合格者の中には、そのショックが後まで尾を引いたり、後期で志望校を変更したりするなど、不

合格のマイナスの影響が見られました。県教委のアンケートによれば、前期不合格者の23%(保護者から見れば37%)が「ショックで後まで尾を引いた」と答えています。また、前期不合格者の3人に1人が、後期では別の学校を受験しています。

学力低下の不安

前期選抜の合格者は早い段階で合格が決まり、また、学力検査に向けての勉強も少ないため、その学力に不安を感じている教員が多いです。高校全体の学力低下を心配する声もあります。全体としては約30%が前期で入学しますので、この点に関しての検証は必要です。

前期合格者に対して高校から課題を出すことが求められましたが、これは、合格後は勉強しなくなるのではという中学校側の不安が大きかったためです。自己推薦型選抜を導入した理由の一つは、「全ての高等学校・学科において生徒の個性や意欲を評価する選抜を行うことにより、中学生が自らの進路について主体的に考え、学習や諸活動に積極的に取り組むことが期待できる」(県教委『基本方針』)ということでしたが、このような期待は非現実的であったといわざるをえません。

自己推薦について

中学生の段階での自己推薦、自己アピールは好ましくない、無理であるという見方があります。心身ともに発達途上の段階において、自分の個性や意欲を見極めてアピールすることが可能なのでしょうか。また、それを求めることは教育的といえるのでしょうか。この点については見解の分かれるところでしょうが、議論が必要です。

(7) 後期選抜について

今回のアンケートでは後期選抜について聞きませんでした。これについても若干触れておきます。

後期選抜は昨年度までの一般選抜に相当しますが、変更点は、全学科で志願理由書、面接、作文・小論文、実技検査を実施できるようになったこと、専門学科で「傾斜配点」を実施できるようになったこと、理数科・英語科・国際教養科と普通科の間で「第2志望」を認めることができるようになったことです。

志願理由書、面接、作文・小論文は一部の学校で実施しましたが、前期選抜と同様の問題があったものと思われれます。

「傾斜配点」はバランスを欠いた学力形成を促す懸念があります。また、「第2志望」については、第1志望の軽視、学科の序列化、不本意入学などの懸念があります。今後、これらの点の検証とともに、志願状況への影響も見えていく必要があるでしょう。

(8) 今後について

前期選抜については、ほとんどの高校教員が廃止を含めた抜本的な見直しを求めています。

現行制度の下で、改善できるところは改善しなければなりません。その際、各高校ではあらためて前期選抜の必要性について検討すべきでしょう。また、制度自体の抜本的な見直しも緊急の課題です。

今回の選抜方法は、各高校の特色づくりの推進と、それに応じた選抜方法の多様化をねらいとして導入されました。しかし、これがもたらしたものは、高校間の「生徒集め競争」と、それに翻弄される受験生の苦悩でした。上にも述べたように、高校ごとに「求める生徒像」を提示して生徒を募集することは、公教育のあるべき姿とは思えません。高校で学ぶことを希望する中学生に、等しく教育の機会を保障するような高校のあり方と、それにふさわしい入試制度を実現することが教育行政の責務であると考えます。

2004年10月

長野県高等学校教職員組合高校教育専門員会

片桐 邦雄（伊那北高校）

甲田 泰広（上田染谷丘高校）

檀原 毅也（穂高商業高校）

寺尾 真純（野沢北高校）

宮本 和夫（松本筑摩高校）

輪湖 洋輔（岡谷南高校）

倉科 浩彰（高教組本部）

長野高教組 026-234-2216 FAX026-234-2219 naganokokyoso@zenkyo.org

<http://w2.avis.ne.jp/~kokyoso/>